

65年を振り返って

2008.10.27

(自分史) (A4 72ページ)

矢田 隆是 生年月日 昭和18年4月22日
 やだ たかよし 出身地 大分県 別府市
 血液型 AB型

勤務先(元) 神戸製鋼
 コバルシステム
 海山鉱業

* ページインジケータ のところに page no を入力すると直接参照することもできます
 * スームインジケータ のところに 150 を入力すると拡大サイズで参照することもできます

まえがき	page 2	page	page	page	page	page	page
① 大分県別府市	3	⑪ 日記と私	17	⑳ 同僚・後輩	35	㉑ 高校時代	49
② 野球と私	4	⑫ 私と寮生活	18	㉒ カンチ口会	38	㉒ 伊丹・尼崎	51
③ 私とコンピュータ	5	⑬ 新婚時代	20	㉓ 一杯会	39	㉓ 加古川市	52
④ 植物と私	6	⑭ 私と先生	22	㉔ 私とパチンコ	40	㉔ 小・中学時代	53
⑤ 私と友人	7	⑮ 私と上司	24	㉕ 植物園と公園	42	㉕ 苦しかった時	54
⑥ 私の文字	9	⑯ 私と転居	26	㉖ 海山時代	43	㉖ ライバル	55
⑦ 海外勤務	10	⑰ 私の仕事	28	㉗ 自動車免許	44	㉗ コレクション	56
⑧ 東京時代	13	⑱ 私と先輩	30	㉘ 孫たち	45	㉘ 健康・体力について	57
⑨ 鉄鋼短大時代	14	⑲ 花畑work	32	㉙ 子供たち	46	㉙ 趣味・余暇	58
⑩ 阪神大震災	16	㉚ 両親と姉弟	33	㉚ 私と神戸	48	㉚ 格闘技・ホクシング	59
						㉚ 65年 生きて	72
						㉚ 独楽まわし	60
						㉚ シルバー人材センタ	61
						㉚ 同窓会	62
						㉚ 固まった 時	63
						㉚ 輝いていた時	64
						㉚ 三木市に住んで	65
						㉚ 終戦記念日	66
						㉚ 北神協	67
						㉚ 人事・労働システム	70

プロフィール

<ul style="list-style-type: none"> 生年月日 昭和18年4月22日 出身地 大分県 別府市鉄輪 血液型 AB型 	<ul style="list-style-type: none"> 住所 電話・FAX 携帯電話 E-MAIL URL : https://www.t-yada.com/ 	<ul style="list-style-type: none"> 特技 なし プロ野球 阪神タイガース サッカー 大分トリニータ 歌手 都はるみ、美空ひばり、青江みな、石原裕次郎、
<ul style="list-style-type: none"> 小学校 別府市立 朝日小学校 中学校 別府市立 朝日中学校 高等学校 大分県立 大分工業高等学校 短大 鉄鋼短期大学 (現:産業技術短期大学) 	<ul style="list-style-type: none"> 家族 妻 長女・長男は独立、孫5人(男2、女3) 趣味 植物観察、植物園、格闘技、野球 演歌、パソコン、囲碁、自然散策 長所/短所 おだやか/中途半端 	<ul style="list-style-type: none"> 花 ヒメヒマワリ 樹 タラヨウ、タブノキ、モッコク 相撲 千代大海 草 オドリコソウ(遭遇してみたい) パソコン インターネット、音楽、ゲーム

自 分 史

2006年4月11日 矢田隆是

自分史という言葉聞いたことがある。そんなタイトルの本のようなものを見たこともある。多分書き方のコツなどが載っているのだろう。今から記すものは、それに近いものであろう。でも自己流である。

今日は西暦2006年4月11日（平成18年）だ。自分の誕生日（西暦1943年4月22日）からすると63歳直前である。“史”ということからして年度、時間順に・・・というのが相場なのかもしれないが、そうではなく、それこそ思いつくままに、例えば「私と野球」というように自分の人生を一つのキーワードから記述し、積み上げてみようと思う。

これを記録したからといって、価値のあるものでもないし、他人に見てもらおうと意図するものでもない。それだけポテンシャルある人間ではないし、全くの凡人なのだから。

自分なりにひとつの項目に対して、それとの関わりあいを表現してみたらどうなるのか・・・？。この試みをいつかやってみたいと思っていたことだ。神鋼のOB会（一杯会）の席でそんな話をしたことがある。2～3年前だったろうか？物事を記述・記録する時、えてして人は脚色したり、誇張したりしたくなることがある。これを進めていくうち、そんな局面もあると思われるが、それでは自分で価値を下げるということになるので戒めておきたい。

近頃、もの忘れをよくする。最近のことはもちろん、昔のことも徐々に記憶から遠ざかっている。これを記しておこうと思ったのは、これが一番の動機かもしれない。

私が生まれたのは、別府市鉄輪（かんなわ）井田というところ。別府市は全国的にも温泉で有名なところであるが、その中でも鉄輪（かんなわ）というところは、街中・1年中湯けむりがもうもうと立ち込めている地獄地帯である。別府の観光写真に必ず載っている「地獄と高崎山の景色」。そこが私の生まれ育った場所だ。上から坊主地獄、海地獄、十万地獄、金龍地獄、鬼山地獄・・・たくさんの地獄がある。地獄とは熱湯や蒸気が噴出しているところだ。

昔（昭和30～50年代）は小・中・高校の修学旅行で人気の高い場所でシーズン中は生徒で一杯だった。旅館もひしめくほどあったし、数々の屋台も繰り出しお祭りのような状況が日常的であった。また、温泉場であるので、街でお年寄りの湯治客を多く見かけた。北九州・四国・中国地方から毎年時期になると必ず鉄輪に来るといふ人が多かった。神経痛やぜんそく、関節痛などの持病を治すためである。貸間といって、部屋だけ借りて炊事道具、食料をなど持参したり、もしくは鉄輪で調達して自炊をしながら長期間滞在、休息し、温泉に入り・治療に専念する・・・結構な身分の人もいれば、切実な人もいたようだった。

それと、もうひとつの地獄というものもあった。もちろん今でもある。それは主に調理用の地獄である。地獄地帯から蒸気を引き込み自宅もしくは貸間で調理する（蒸気熱）釜、おくといい。米、芋（サツマイモ、ジャガイモ）、ホウレンソウ、カニ、タコ、トウモロコシ・・・なんでもござれ これらのものをゆでることが出来る。私の家の隣にもこの地獄があり、朝・昼・夜の食事に毎日毎日これを借用、使っていた。おやつにも地獄で蒸したものが多くでた。当時、キリコンモチとかイモ、エダマメなどよく食べた。当時は料理に電気・ガスなどは使っていなかった。

学校区は朝日地区といい、朝日小学校1つ、朝日中学校1つの地域であった。したがって同窓会も小・中学校が一緒である。別府市内から見ると田舎の学校である。朝日中学校で野球の練習試合をすると試合後の懇親会に必ず蒸かしたジャガイモを出した。それを選手みんな食べていたし、他の中学校の選手にも人気があった。下級生が、学校のすぐ上の坊主地獄までふかしに行っていた。田舎の学校ということでコンプレックスがあり、絶対勝ちたいという敵対心も旺盛であった。スポーツ・勉強、全てにわたって。別府市内にでるのは亀の井バスが大分交通のバスであった。別府駅まで約30分。大分工業高校に通う時は40分歩いて亀川駅まで出た。

18歳まで故郷別府に住んでいた。離れて50年近くなる。いまでも帰りたい気持ちはあるがそうもいかない。3年ほど前に墓を神戸に移してから帰る機会がめっぽう減った。親戚の結婚式や小・中・高の同窓会等で2、3年に一度帰るくらいだろうか。友人もまだ沢山いる。でも行き来することはほとんど無く、年賀状やメールで近況連絡するくらいだ。18歳までここで生活した故郷だ。方言だってまだ残っているし懐かしい街だ。別府の街も変化している。北の亀川、鉄輪、安心院のほうに延びている。大分自動車道ができてから、湯布院、くじゅう、阿蘇、長崎のほうに短時間で行けるようになった。

なお、別府湯けむりの景色は「21世紀に残したい日本の風景100選」で富士山について全国第2位にランクされた。

私が野球をするようになったのは、ごたぶんにもれず三角ベースからだ。軟式テニスボールを青竹のバットで打つ広場での野球からだ。別府市鉄輪東の太師湯前の広場である。外野には一つ、5, 6トンもあるような大きな庭石が積んであった。そのあと小学校4, 5年になるとグローブを買ってもらってキャッチボールをはじめた。相手は、近所の兄貴分 松屋の広(こう)ちゃんだ。グローブは布製で球を受ける真ん中だけに皮を張っているというものだ。

そのうち広ちゃんは中学校の野球部入りピッチャーで4番を打ち、キャプテンになった。文字通り大黒柱の活躍だ。そんな関係で 自分も中学校になったらまよいなく、すぐに野球部に入った。2年生の時に捕手の補欠で登録され新人戦にも出場するほどだった。やはり中体連での試合が思い出に残る 捕手で5番を打っていた。当時の選手はそれぞれ個性的で熱心であった。朝日中学は弱小チームで成績はあまり芳しくなかった。その後、広ちゃんは東京大学法学部に現役で入ったことを付記しておかねばならない。もう一つつけ加えると、神戸製鋼の元副社長光武紀芳さんは九州大学出身だが、高校は別府鶴見が丘高校で広ちゃんとクラスメートだったようだ。時々私の実家のすぐ前の松屋旅館(広ちゃんの家)に遊びにきていたようで、おばさんから「ミツタケボウ、ミツタケボウ」とよばれていたようだ。

高校ではクラブ活動はしなかった。それは遠距離通学であったからだ。別府市鉄輪から大分工業高校に通うに片道2時間はたっぷりかかったためである。体も大きくないし、野球をする余裕もなかった。

神戸製鋼に入って寮の食堂で同じ新入社員から設計部の野球同好会に誘われて、二つ返事でそのチームに入った。2年ほどたって会社の軟式野球部に勧誘されそれにもはいった。ある時はもう一つ西灘のチームにも入っていて、同時に3チームに登録されていた。それこそ野球・野球の連続で休日はダブルヘッダーにもう1試合なんてこともあった。神鋼の野球部での試合は「公用外出」という取り扱いだった。ちょうど技術員教育の期間中だった。工作中(勉強中)に神戸市(のA級で)16選抜や兵庫県都市対抗の試合にも出場した。また鉄鋼大会といって住金、川鉄、新日鉄などとも試合をした。守備はずっと捕手で設計のチームでは4番を打ったこともあるが5番打者が多かった。入社5年して鉄鋼短大入学即野球部に入った。ここでも尼崎野球協会のA級に位置づけられ尼崎の企業や近隣の大学とも試合をした。結構強かった。チームメイトは川鉄・新日鉄・鋼管・住金・川重・淀鋼・日本製鋼出身者らだった。川鉄の芋谷君との首位打者争いが印象的だ。

10年ほど野球に遠ざかっていたが、三木市に住むようになってからソフトボールを15年やったし、少年野球にも関与した。少年野球は達洋が入部したこともあって指導者として携わった。このときすごく強くて三木市はおろか、160チームが参加した、大阪知事杯に招待されて優勝するなど殆ど試合に勝っていた。結局少年野球は12年指導者として在籍した。これもいい思い出が沢山ある。3つのチームを指導してきたが、やはり最初の達洋らのチームが一番強かった。人数が多かったのと、それぞれの選手の意気込みが違っていたように思う。

私の会社生活はコンピュータとともにとっていいだろう。入社5年までは品質管理の仕事や研修期間（技術員教育・鉄鋼短大）だった。23歳（1967年）の秋にその関係の仕事が変わった。IBMの大阪でシステム360入門、コンピュータプログラム入門(PL/1)等の講習を受けたころから始まる。当時の KOMPBS プロジェクト外では鉄鋼・神戸製鉄所の製品構造の最適化をし、製造・販売することをねらいとしていた。そのプロジェクトの名前をとって“KOMPBS” “LPチーム”などと呼ばれていた。自分はそのプロジェクトの中でプログラマをしていた。「受注サマリー」「i の決定」「生産諸元マージ」などのプログラムを3年間担当した。横浜のコンピュータセンターや大阪淀屋橋の日生コンピュータで徹夜することが多かった。

そのあと昭和45年、結婚と同時に IBM のアプリケーションプログラム シミュレーション GPSS の社内普及・教育を担当しマニュアルも自社用に作成した。1年間と短い期間だったが英文マニュアルを通勤電車の中で読む日々が続いた。それほど集中して勉強したのも入社以来珍しい。必死だった 他の人に教えるなんて・・・自分も初心者なのに・・・。

昭和46～59年（1971～1984）の13年間は本社システムで人事・労働関係のチーム・リーダーとして給与計算や人事・労働諸制度の運用システムを担当した。これもいきなりその仕事の先輩連中をさしおいてチーム・リーダーを仰せつかった。本社での後半2年間はアプリケーション（適用業務）から離れ、企画調整部門での業務を担当した。予算を作ったり、システム計画を設定したり、鉄鋼他社との窓口業務をしたりした。

1984年後半からはじめての勤務替えでエンジニアリング事業部に移動した。3年間 PMSS を担当したこれはプラント建設の営業・受注・設計・製作・輸送・据付・指導・運転・保守の一部または全部の領域にわたる業務支援するコンピュータシステムである。そのうち1年間は海外でのプラント建設工事プロジェクトに参加した。中近東のバーレーンという国にアルミ圧延工場を建設する仕事だ。この建設工事スケジュールの進捗管理をマイコンコンピュータで使いアルテミスというソフトと PERT 手法を適用した。摂氏 50℃を超える酷暑の地、アラブの地である。これも貴重な体験であった。

1987年からはコンピュータが新会社支援およびコンピュータシステムの窓口業務を中心とする神戸製鋼サイドのシステム運営を担当した。7年間だった。そのうち後半4年間は神鋼のシステム近代化を CIM 化という目標で SWIFT 活動と名付け久しぶり大型投資の元で実行した。

そのあと1994年からコンピュータへ出向して東京地区の神鋼関係会社のシステム化を2年間、1996年に海山鋳業という中小企業に出向し社長付の立場で砕石、産廃、生コン等土木建築資材の販売管理・出荷管理システムを構築し、併せて ISO14001 取得活動を推進し3工場同時取得をはたした。会社生活の最後は兵庫県三田市の北神生コンクリート協同組合で生コンの受注・出荷業務（協組業務）を担当した。この時はコンピュータとは無関係であった。これも貴重な体験で面白かった。

私は植物が好きだ。花や草、樹木などに接すると時間を忘れるし、どんだんのめり込む。でも観葉植物、熱帯植物、外国植物は見ても分からないので興味が低くなる。どうして植物が好きになったのか？多くの草・花・樹の名前をどうやって覚えたのか、やはり1994年コベルコシステム東京勤務になってからだ。東京および周辺の都市の植物園・公園をくまなく散策するようになってからだ。テーマパークが好きなのか植物が好きなのかといえば、どちらも好きということになる。

約160ヶ所の植物園、都市公園、国立国営公園、区立公園に行った。東京23区、周辺都市10市や神奈川、千葉、埼玉県にも足を伸ばした。通勤は、東京都江東区にある管理職専用の“清澄寮”から東陽町のコベルコビルまで歩いて25～30分、途中に19haの木場公園を通過して桜、梅、ギンヨウアカシア、ヒュウガミズキ・・・四季折々の花が咲き、芽が吹き、紅葉を見ることができる。これが日常生活の中にある、なんと恵まれたことか！！ 江東区には、すぐに行ける親水公園や広い都市公園などが沢山あった。

そして夜になると、夕食・入浴後自室で、次の予定 東京の植物園・公園を調べる。沢山調べてその経路・位置関係も調べる、その組み合わせで、次週、次々週の予定を建てる（実際はもっと多くの候補ができる）。週末の2日間その計画に従って歩き回る。朝 寮を出て、まず地下鉄東西線の門前仲町駅から公園最寄り駅まで行き、そこからはたいていは歩く、だいたい10～20分の間で目的地に着く。1ヶ所に平均2～3時間を費やすだろうか？ そこが終われば次の公園までまた地下鉄（殆ど地下鉄利用、JRも時にある）で移動する。1日2～3ヶ所は行く。持ち物はカメラ、東京地図、コンビニ弁当・・・etc、そうだ必ず持参するもの、忘れられないものは小図鑑や筆記用具だ。

克明にぎっしり、植物名を、公園名を記録したノートが今でも残している。よくもここまで行ったものだ。ここまで記録したものだとは自分で感心する。それが高じてか？ 東京勤務が終わってからも関西でもやはり、あちこち植物園・公園巡りをした。この場合は家内と一緒に。また最近多くなった同窓会等で各地へ行くときはやはり植物園・公園を求めて行っている。全国植物園協会の本の中でも関東・関西・四国・中国・九州いろいろ行ったところを印している。

あれから10年、いまでは家まわりの花畑でほとんど毎日花・植物に接している。

友人とか親友とは何か？改めて考えてみた、にわかにそれに答えられない。小さいころから順に名前をあげると、その人のイメージ、その人との関係から記述できそうな気がする。

最初に出てくる人は「佐藤友秀さん」だ。私の生家（大分県別府市鉄輪井田4）の裏に住んでいた同じ年、いつも一緒に遊んでいた。道路に絵や字を書いたり、砂遊び、岩登り、釘刺し・・・など、でも小学校入学の時にまでいたか否か記憶していない。いつ頃か他に転居していなくなった。彼の2つ上の兄さんも一緒に遊んでいた。その兄さんは私ら2人に道に絵を画いて当時の朝鮮戦争のようすを説明してくれた。38度線を界に攻勢だの劣勢だの・・・日々変わる状況を。戦争が昭和25年（1950年）6月25日に開戦、1953年7月17日停戦協定であることからして、私たちが7～8歳、兄さんは10歳くらいである。よくもこれほどの子供に戦争・戦況のことがわかっていたのか今もって不思議であり、感心するばかりだ。

そのあとは、（別府市立朝日）小学校と一緒に登下校した仲間たちだ。佐藤峯祥さん、河野明信さん、石橋章雄さん、田中康夫さんらである。6年間殆ど毎日、登下校は一緒だったと思う。帰りに田んぼの畦道や水路をくずして魚やかに取ってお百姓さんに大声でしかられ逃げまわったこと、途中で給食のコッペパンの残りを野原や川岸で食べたこと。いつも懐かしく思い出す。

学年によって友達も変わる。今では住所が分からない人が3人いる。竹下弘さん、池田保さん、内良三さんである。竹下弘さんは、小3～4年ころの友達で彼は中組に住んでいてよく遊びに行った。お父さんが進駐軍の関係の仕事だったようで遊び道具やおやつなど珍しい物がたくさんあったように思う。中組には可愛い女の子、西村史子さんがいたので行く機会が多くなったのかもしれない。池田保さんは5年の時に広島の方から転校してきて、6年生卒業直前にまた福山の方に転校して行った。朝日小学校の卒業名簿にははっきりと残っている。2年間だったがユウドウの山でチャンバラをしてよく遊んだ、矢野のりちゃん、河野ひでみちゃん、瀬尾かっちゃんなどと一緒に、ある時は北鉄輪で渡辺吉ちゃんと集団で喧嘩したことがあった。池田保さんが吉ちゃんをライバル視していてきらっていたのだろう。福山・別府に離ればなれになったが10年ほど文通は続いた。私が鉄鋼短大1年の春休み山陽・山陰旅行したときに福山市内を案内してくれた。池田保さんの兄と4人でお兄さんの家で麻雀をしたと思う。それを境になぜかお互い音信不通となってしまった。内良三さんは鹿児島出身で鉄輪御幸の大谷公園横の温泉療養施設にいた。泊まりに行ったりもした、

彼の名前は小・中学校の同窓会名簿にないので記録しておこうと思った。

中学校に入ると野球部の人と友達になったが、特に本田信之さん（通称デコさん）とは1～3年を通してずっと同じクラスだったし、野球も勉強もよく連絡をとってお互い頑張った仲だ。高校、大学、社会人と別の進路を進んだがいまでも親友としておつきあいをさせてもらっている。私にとっては最大の友といえる。野球部では首藤誓さん（通称チコさん）とは練習も一緒、帰りも一緒、よく喧嘩もした。私の方が分が悪かったようだ（1勝3敗？）、その後彼は別府商のエースとして高校野球で活躍した。他に野球部の連中の名前をこの際列挙しておく。渡辺吉五郎、藤川寛治、内藤純行、佐原征四郎、河野日出海、高本昌貞、池辺末喜君、竹下康治君たちだ。

高校は遠路からの汽車通学ということで、授業以外での自由時間で遊ぶことは少なかった。それでも、矢川突（つこう）君、矢田正道君とはいつも行動をともにした懐かしい友人だ。学校から大分駅まで帰る途中、下宿していた矢川・矢田両君や平松君・深田君と竹町商店街で、当時はやった大鵬焼きを買って食べたことなどいい思い出だ。高校時代の同窓会は殆ど無く友人と会う機会は少ない。でも2003年に大分市で40年振りにあり90人中27人の出席があり校歌や応援歌を私が先頭になって歌ってにぎやかな再会だった。矢川・矢田両君は欠席だったが矢川君は別府観光港まで迎えに来てくれて一緒に今の大分市や旧・新双方の大分工業高校・トリニータの本拠地サッカー場などを案内してくれた。

大学（鉄鋼短大）でもやはり野球部の連中と親しくした。山本徹明さんは青雲寮で同室だったし、上高地・美ヶ原・伊勢など山や旅行もいつも一緒だった。そして毎晩勉強するのでなくて、話ばかりして夜遅くまで起きていた。炊事場でラーメンを作って食べる日課だった。私にとって同僚でもあり、兄貴だ。人生に一番影響を与えた大先輩である。1978年出張先のバンコックで事故のため38歳で亡くなったのが悔やまれてならない。石尾・西村・楠原さんの同じ野球部に加え、石田（サッカー部）、衣笠（柔道部）さんらとあわせ“7人の侍”と呼ばれていた。4期機械A組のまとめ役・中軸であったように思う。

会社時代の友人は、新入社員のときの松井広文君とは六甲台神鋼寮で毎日のように卓球をしたし、1962年～65年頃の歌謡曲を好んで歌っていた。彼とは野球もライバルで2年間ほど設計のチームと一緒にやった。4年間勤務して退社してしまって今では交友はない。山口真さん、吉田順さんはシステム関係の仕事で長い間ともにしたし、いまでも時々再会して旧交を暖めている。

私の文字、自分でも好きだと思ふことが多い。厭な時も結構ある。率直に言って上手なほうであると自惚れている。すみません！ 文字の上手な人とそうでない人の違いについて考えたことがある。それは自分の字に注意しているか否か、上手に書こうとしているかどうか、丁寧に書こうとしているか否か、すなわち無頓着であるか否かによるところだと思ふ。その結果、違いに現れるのだろう。

そう言えば、自分は小学校のとき、習字を習いに行っていたわけでもないが小さい頃から関心があったように思ふ。そして中学校時代、字の上手な先生や友人のことをよく覚えている。国語の先生、合原先生であり、友人では折原さん、平川さんが印象的である。女子では麻生さんがすごくうまかったようだ。そういえば、総じて女の人の方が上手できれいな字を書く人が多いと感じている。それだけまじめに対応しているのだと思ふ。

高校に入ってから、後藤恒康君の字をしきりに真似した時期がある。大学では杉本さん、後藤さんはすごく達筆であった。会社では中司馬さんが上手だと思っていたが、彼が体を悪くして退職後大丸デパートのギフトコーナーで字を書く仕事をしていたことを聞いたことがあるが、なるほどだと思つた。入社して配属された時の同じ部署の先輩、豊村さんの字もすごかった。私の字の及ぶところではなかったと今でも思っている。

毎年交換する年賀状の中にも、曾宮さん・山本三代さん、森田さんなどはすごく上手だと思ふ。森田さんはあっちこちの書道展示会に出品しているだけあると思ふ。

さて、自分の字は、うまく書けていると思ふときが20%、そうでない時が80%くらいだと思ふ。今でもいろいろ練習をする、細長く書いたり、太く・低めの字を書いたり、字の間隔を空けたりして工夫をこらしている。進化しているようには感じないし、定着するのだろうかと思ふと逆に心配している。

私は神戸製鋼時代、全期間にわたりコンピュータシステム部門に在籍し、組織的には本社部門であり、勤務場所は神戸市中央区(入社時は葺合区)脇の浜町がほとんどである。そんな中、1984年～87年の3年間はエンジニアリング事業部に所属した。勤務替え当初から事業部の特性から海外での仕事の機会があることは覚悟し、期待もしていた。そのために英会話の練習・勉強はずっと続けていた。意外とその機会が早く訪れたと思う。半年後の'84年12月から中近東のバーレーンという国に行くことになった。バーレーンといえば今でこそある程度日本でも、アジア・バレー、サッカーで知れるようになったが、当時は聞いたこともなかったし、そんな国があるのかと思った。日本の淡路島ほどの小さなアラブの暑い国である。金融都市と派遣教育で教えられた。

仕事は、やはりコンピュータ関係である。バーレーンのシトラ島にアルミ圧延工場を建設する現地プロジェクトで工事スケジュールの進捗管理する仕事だ。担当者は自分一人だ、他にはだれもいない。1984年12月初旬寒い朝、神鋼5人、協力会社3人でキャセイパシフィック・伊丹空港から香港経由、バーレーンに入った。香港観光とホテルでの休憩をはさんで(香港空港での待ち時間を含む)約20時間くらいかかったと思う。バーレーン空港では迎えに来てくれたが、とても薄暗く、生暖かい、さびしい雰囲気だった。貧しい国のように感じたが、空港からキャンプまでの車外から見る景色ですぐにそれが一掃された。豪邸が並び、近代的な建物も見受けられたからだ。

キャンプは神戸製鋼社員15人、協力会社25人、計40人所帯だ。GARMCO (Gulf Aluminum Rolling Mill Company) といってその国でも親しまれていた。場所は首都マナマから10kmくらい離れたシトラ島で海峡を挟んでいた。シトラブリッジの夕日やイルカの群れ、川のように流れる潮の満ち引き、イラン・イラク戦争でペルシャ湾沖合いを就航する軍艦の勇姿、モスクから聞こえる音楽・お祈りのひびき、などは忘れられない光景である。

建設する主要な設備は、アルミ溶解炉・スラブ熱塊炉・熱間圧延機・冷間圧延機・熱処理炉・仕上げ機械および水処理、ガスコントロール、電源設備、地下埋設配管・ケーブル、それとアドミビル・圧延工場建屋、駐車場、消火設備、研究施設など広範囲の機械設置・土木・建築工事である。スーパーバイザーにアメリカオクラホマのカイザー社が関与した。受注条件の一つに、PERTを使ってのコンピュータによる進捗管理であった。このシステム構築には山田課長と都主幹を中心に進められた。私はこの建設工事の3000件におよぶアクティビティ(作業項目)を着手・経過日数・完了等を調べてコンピュータに入力し、分析した結果を明渡所長承認を受けカイザー社に提出するのが主な仕事である。CPPR といって、建設の進捗にあわせて工事金額を請求するシステム、日本国内から輸送されるプラント機械、資材などを港で陸揚げチェック、税関通過確認などのマテリアルコントロールシステム、現地建設 Labor 管理システムなどもあ

わせて運用した。任期はちょうど1年間であった

着任時は、まだ土漠（サバンナ？）の中にあっちこっち穴・溝を掘り起こし、コンクリートを打設したところがみられるくらいで殆んど初期段階であった。1ヶ月、2ヶ月、3ヶ月たっていくうちに、冷延ミルが建ち、ホットミルが建ち、溶解炉が、水処理設備が・・・次々に整っていく。もちろんミルヤード（工場建屋）、メンテナンスヤード（修理工場）、ラボラトリー（試験・研究棟）が併行して建設される。あっちこっちで上下作業が行われる。地下カルバートでは電気配線、ガス・水道管が敷設されるし、オイルセラー（給油だまり）もある。素人の私には工事の進捗は目を見張るものがある。

といっても、すべてが順調ではない、障害やトラブル等も多い。建設資材、建設機械、器具および建設要員などの不足が生じては、日本へ緊急手配したり、現地調達する。また、海外ベンダー（代リス モール社）の消火設備の納入遅延、（韓国 現代重機社）の天井クレーンの製作ミス・手直し、時には不注意による転落事故（死亡）や火災が発生して工事の停止を余儀なくされる。おまけに、イスラム特有の断食（ラマダン）期になると特に、現地ワーカーの極端な能率低下やしょっちゅうみまわれる砂嵐、4月下旬～10月までの40℃を超える猛暑での屋内・外の作業は水分補給と十分な休憩・休養が必要となる。ヘビやサソリが出てくるわけではないが、それこそ難工事の連続である。

コンピュータ業務でも結構苦労した。電源不安定、砂あらし、猛暑つづき、クーラ故障、誤って工事中のケーブルの断線、etc が原因でコンピュータも再々ダウンする。アルテミス（バーレンメティエ社）がマナマから回復作業にくるが、ひとすじ縄ではいなくて、ドーハ、ドバイなどいろんな所からエンジニアがきてくれるがなかなかFIXしない。その度にするデータのバックアップと代替作業を何回しただろうか？

温度計は4月中旬から40℃を超え、10月中旬まで連日この状態が続く。特に8月になるとさらに酷暑となり50℃を超える（直射ベースでは60℃）日がほとんどであり、それこそ車のボンネットの上でスクランブルエッグができる、本当の話である。普通日陰は涼しいものだが、ここでは涼しいどころか熱風炉からの風をまともに受けるようにまさに居場所がないといったところである。

いくら高温といえどもやはり、ヘルメット、タオル、作業衣、安全靴等の装着は必須であり、肉体的にも、精神的にも極限の工事になる。それでも、工事進捗の節々で催されるパーティーには癒される。たとえば、「赤通し」といってホットミルに熱間スラブをはじめ通して圧延する日の夜は、キャンプで全員による焼肉パーティー。その当方で100人を超える工事担当に加え日本人学校、日本企業（現地法人）関係者も交えたりして、盛大なパーティーとなった。なんといっても、招待者の中に、JALのシュワーズのお姉さんたちがいて、はなやかな一面もあった。「はきだめに鶴」

のごとく。…そういえば、別の機会だが、山下汽船の船上パーティーに招待され、ペルシャ湾上の豪華貨物船で「お寿司」をたらふく食べたり、「さっぽろビール」や「秩父の水」もご馳走になったことがあったが、海外では、おなじ日本人ということで、いろいろな機会を通して交流がさかんであるということも、この時わかった。

あるときは、バーレーンには、AISCO といって神戸製鋼が建設・運転指導しているの鉄鋼関係の工場があり、そこに同期入社の友人が2人いて彼らともマナマ市街の日本レストランで食事や飲み歩いたこともあった。

アラブの国とはいえ、キャンプではアルコールはフリーであり、ホテルのレストランや街のバー、中国・韓国・インドネシア・タイ・などのレストランでもお酒はのめる。ふつうの下町には飲み屋みたいなものはない。したがって街で酔っ払いを見かけたことはないし。ましてやケンカする人など見かけたこともない。戒律が厳しいが故なのか、たち小便なども見たことがない。なにをするにもこわい罰があると聞かされた。

工事完成近くなると、コミッションングといって試運転が行われる。性能試験と生産性テストの双方が含まれている。二つとも合格するとテスト OK ということらしい。私の目から見るとほとんど終わっていると思われるのに、カイザー社からあちこち、クレーム指摘される。いずれも英語であり、回答するのに苦勞する。もちろん工事スケジュール上のこともある。着手している/していない、終わっている/終わっていない・・・など。

自分の担当エリア・機械が完成すると日本の技術者・職人さんは帰国していく。早い人で6～7月に帰る人もいたが、10月～11月にほとんどの人が帰国した。その都度催される送別会なる宴会もキャンプ内です。私の帰国希望は年内であった。12月16日にバーレーンを出て、途中バンコックにより、久しぶりに寒い日本に帰りついたのが12月20日だった。少年野球の子供たちや近所におみやげを買って帰った。終わってみれば貴重な体験であった。

- 初めての異国、中近東というのも良かった。
- 建設工事で、これも未知の分野であった。
- 海外を渡り歩く、日本人技師・職人さんとの交流
- コンピュータによるプロジェクトへの貢献が出来た。(無力の領域も多々あり)

大変な仕事の合間、あちらアラブでは金曜日が休みで前日の夜は「ハナモク」といって、街に出てスークで買い物・散策などしたこと、5時からの早朝ソフトボール、12月までヒルトンホテルのプールで泳いだこと、キャンプ内での麻雀、毎週1回夕食のビーフステーキなども懐かしい思い出である。あげればきりがないほどである。

なお、この年国内では21年ぶりに阪神タイガースがバース、掛布、岡田、真弓の豪打で優勝し、私も首都マナマで祝勝会をした。また、御巣鷹山で日航機が墜落した空前の重大事故があった印象的な年でもあった。

コベルコシステムに出向したのは1994年2月であった。私の場合は（同じシステム部門の殆どの人たちが新会社設立にあわせて出向してから）7年ほどあとである。本社システム SWIFT 企画室から吉田順さん、岡本さんと3人同時であった。私の担当は神戸製鋼の東京地区関係会社に対するシステム化推進、システム案件の開発・納入である。そんなことで当初は上司である今村副本部長に随行して関東地方のあちこち関係会社に営業訪問の毎日であった。

でも主な任務となったのは、千葉県市川市にある神鋼海運(現、神鋼物流)サービス・センター向けの置場管理システムの開発納入である。プロジェクト初期のシステム要件設定、基本設計を担当した。会社のトップから担当者までの意思結集と目標設定のために幕張の海外研修センター (OVTA) で合同研修会&キックオフミーティングからスタートした。神鋼加古川製鉄所から船積み・市川港で水揚げし、サービス・センターのヤードに保管した鉄鋼製品(線材・厚板・棒鋼・鉄粉・・・)を客先の要求に応じてタイムリーに納入するまでのトラッキング&トレーシングである。その中で一番印象的なのは、無線端末機の導入と置き場の番地管理である。厚板は重ね置きするので立体認識する必要があった。設計段階で加古川製鉄所の見学に行ったり、あの関西大震災の影響でシステム開発の進捗がストップすることなどもあった。

ほとんど毎日 JR 京葉線の越中島駅から二俣新町まで通った。西船橋から地下鉄・東西線に乗り換えて帰ることもあった。途中に、コベルコビルが東陽町にあったからだ。夏の暑い日・冬の寒い日いろいろあった。それぞれの季節に咲く道端の草花をながめながら。同じくコベルコシステムから野々原さんと一緒に、客先主担当は楠木係長であった。詳細設計・プログラム開発は、野々原・山崎・横山さんなどが担当した。

あとになったが、東京時代を語るとき、植物園・公園散策のことは欠くことが出来ない。門前仲町の清澄寮で夕食後寝る前に必ず、植物園・公園めぐりのコース計画を複数たてる。それにしがたって週末に2日間かけて行動する。行った箇所は全部で150箇所を越える。小石川植物園、国立植物教育園、牧野記念庭園、神代植物公園ほか都内、近隣市、神奈川・埼玉・千葉などいたるところに出向いた。そのため、仕事(関係会社まわり)での利用も含めて、東京の地下鉄は殆どの駅で乗降している。

これが最高の楽しみであったし、今となっても貴重で懐かしい体験である。

1965年4月鉄鋼短期大学に入学した。たしか入学試験は前年の11月ころ、それまで1年間受けた技術員教育が終わった後だったと思う。パスした時はこの上なくうれしかった。技術員教育もそうであったが、当時会社が面白くなってやめたい・・・どこか違う部署に変わりたいと考えていた頃だ。鉄鋼短大への派遣(国内留学扱い)は私にとって“渡りに船”といったところである。

六甲台神鋼寮から少ない荷物を軽トラックに乗せ尼崎武庫之荘・鉄鋼短大の青雲寮に運んだ。入学式のことはよく覚えていない。ただ当時の沢村宏学長、奥谷学生部長の格調高い話があったような気がする。入寮1日目学内(寮内)の図書室で新しい数学の本を買ったことがあったが予てから欲しかったし、これからの学生生活を想像するとき、とてもわくわくするハッピーな気分になったことをはっきり覚えている。

あとここで2年間過ごすことになるが、勉強にいそしんだという記憶はあまりない。遊びのほうに勝っていた。まわりの人はよく勉強していた。彼らは疲れてからといって、いつも私と徹っちゃんの部屋へ休憩・遊びに来ていた。機械Aの娯楽室なんていわれていた。そういえば私たちの部屋で毎晩マージャンをやっていたし、疲れてからは夜食のラーメンを作って食べていた。西村さんはモヤシがきらいで、たまねぎが好物だった。

そんなことより、やはり一番印象的なのは野球部での活動だった。尼崎市の軟式野球協会に所属し、近隣の企業・大学とよく試合をした。成績もかなりよかった。何分にも大型選手が多かった。レギュラーのなかに180cmを超えるやからも数人いた。楠原、近江田、西村、石尾、杉森君らだ。かれらはそれぞれ日本製鋼、NKK、住金、川鉄、神鋼出身だ。私も中心打者の1人で捕手とトップバッターをまかされた、新日鉄の田尾さんとの1・2番コンビは絶妙であった。出塁率も高く、その後の大型クリーンアップが得点するパターンで尼崎市の野球協会A級にランクされた。3番を打つ芋ちゃん(川鉄:芋谷君)と首位打者をかけ激しく争ったのもよい思い出だ。異色なのは我々バンカラ族である部員の中から、卒業後ずっと時間が経ってから、博士が出たのは“瓢箪から駒”の驚きだ、川鉄の南君だ。それと残念なのは山本徹明さんと、田尾さん、近江田さんが故人となってしまったことだ。(1年先輩の山本彰吾主将もなくなっただけならいい)

大学ではまとまった休暇がある。夏休み、試験休み、春休み・・・週末にも結構あちこちに旅行・山歩きなどをした。1年夏は10日間かけて富士山登山と富士五湖キャンプをし、箱根の保養所「溪雲荘」にも1泊した。この時は神

鋼の同僚、山崎さん・西野さん・大西君と一緒にだった。2年春休みは中国（山陽、山陰）旅行で、鶯羽山、江田島、ともの浦、広島、秋吉台、萩などを1人でまわった。途中、福山で小学校時代の友人、池田保君に10年振りの再会ができたし、呉では神鋼呉工場（田中琢磨工場長）に寄り、また徹ちゃんの奥様の実家の旅館にも泊まった。防府では和子姉さんとも寄った。2年夏は12～15日かけて北海道・東北を回った。学生周遊券で、神鋼の大西君、愛知製鋼の中井四郎ちゃん、三菱製鋼有谷さんと一緒だった。2年秋には徹ちゃんと上高地・美ヶ原キャンプに、そして七人の侍たちとは伊勢、天橋立、有馬などに行った。最後の卒業旅行はクラス全員で白浜への一泊旅行で最後の宴会で盛り上がった。

最後になったが、勉強はそうしなかったという教科についてどんなことをしていたか・・・、羅列しておこう。

一般教科：英語・数学・ドイツ語・史学・倫理学・物理学・

機械教科：材料力学・製鉄機械・機械工作・内燃機・機械設計・工場管理

実験教科：機械実習・実験、電気実験

だったように思う。さすがに印象がうすい。機械科での成績が1・2番であった、木村君（新日鉄・広畑）、三谷川さん（旧姓：大川さん新日鉄・広畑）であればもっとはっきり覚えていることだろう。

意外だと思うかもしれないが、わたしはこの期間 演劇部にも所属していた。神鋼の先輩・福浦さんや同僚・杉森君からの強い勧誘ではいったもので、大学祭やクラス対抗の演劇祭などで30分～45分程度の舞台を3、4回演じたことがある。その時は結構その気になっていた。もちろん主役ほどではないがその相手役くらいは演じていた。これが縁で、会社に復帰してから時々労演などにも行くようになった。

普段の学内・寮内以外のことを少し・・・といってもその印象はほとんど残っていない。何故ならこの学校生活を充分満喫していたからであろう。ときどき近くの喫茶店「千種」や餃子屋「一幅」に行き飲んでた。私は今でこそ酒が好きになって毎日欠かせないが、当時は飲めない人の部類に入っていた。北海道・関東・九州など関西以外から派遣された人たちはやはり少しの時間を見つけては梅田、三宮、京都、奈良などにもよく行っていたようだ。

今思い出せば、このころがまさに私の青春時代だったような気がする。

1995年1月17日午前5時46分。今から13年半前寒い夜明けに発生した。これほどの自然大災害、私としてはじめての経験である。被害の甚大さ、影響はすでにこれまで報道されている。この日私は東京都江東区の神鋼清澄寮407号室で午前7時前に目を覚まし、いつものように最初に自室のテレビのスイッチを入れた。何でも関西で地震が発生し、30人ほどの人が亡くなったと報道されている。これだけでも大事故ということが理解できた。そのうち航空映像が写し出され至る所で白煙や黒煙がたちこめている。夜明けとともにはっきり認識できるようになった。・・・

震源はなんでも淡路島という・・・三木の实家は明石のすぐ北だ、淡路島は明石海峡をはさんですぐ近く、えらいこっちゃ。寮1階の公衆電話から家に電話したが通じない。回線が混んでつながらないのだ。公衆電話もすぐに使用できたわけでもない。3・4人の先客があり、その人たちもやはり関西？ 通じないという。何回しても同じこと。仕方なく、いつものように木場公園を通過してコベルコビルへ出勤し、会社から電話したがやはり通じない・・・昼近くになってやっと家と連絡がとれた。今のところ三木では家が壊れるほどの被害は出ていないという。ということは命とか怪我とかまでは至っていないということが判明し胸をなでおろした。でもまだ何回と余震が続いておりまだ心配だとのこと。余震はその後2・3日も続いて、夜が心細い・こわいとのこととで近所の友人のところに泊まりに行っていたようだ。

神戸、西宮、宝塚を中心に芦屋、明石、尼崎、三木など周辺各市での全体被害は甚大なものであった。それが関東地方では殆んど普段どおりの生活で、私は休みの日は植物園通いをいつも通り続けているし、気分的にもそんなに変わりはない。喜巳子は余震がこわいというが、達洋は東京だし、郷子はさらに西の福崎にいるのでそう心配はしなかった。ただ、関西への帰省・出張は交通手段が乱れてそれが出来ない。やっと関西での会議が入ったのは15日後の2月6日であった。阪神青木駅から西は電車・バスはなし、歩いて岩屋の会社まで行く。途中国道2号線・43号線や住宅の間を通過したが、ほとんどの住宅が崩壊し、車や橋、電柱、樹木まで倒れており、すざましい様子を目の辺りにみて改めて大震災の恐ろしさを感じさせられた。阪神高速や国道43号線の高架が倒れているのには身震いをするくらいだ。神戸高速鉄道、神戸電鉄の被害も同様に、新開地からの電車はなくバスで長田まで行きそこから神戸電鉄に乗るのが半年以上も続いたようだ。この不便さも経験がない、出張のとき帰るくらいだから。三木市でも福井の県道が崩落した。

これほどの大災難、出来事であるが自分にとってみれば 恐怖とか、強烈な印象とか、悲壮感が実体験をしていないがゆえに 実感が乏しいのも事実である。比較にはならないが、その年に発生した地下鉄サリン事件が近くで発生したため印象深いものがある。

日記についてよくこんなことをいう。「三日坊主」とか・・・、長く続かない例えである。私が日記をつけるようになったのは大分工業高校の同僚の荒金真臣さんの影響がある。彼がつけているということを知って自分も始めた。1962年が卒業の年だから、その前の1960年くらいだと思う。今年が2008年なので48年にもなる。長く続いている、億劫なときはつけない、面倒くさくなればその気になるまでほっておく、これが長続きするコツだと思う。48年間のうち10年くらいはつけていないと思う。もちろん高校時代、神鋼入社、鉄鋼短大、バーレン時代、東京時代などはつけていると思う。たしか、海山時代はつけていないと思う。沢山の日記帳が残っているので調べれば分かる。

なにを書き記すか？ やはりその日の出来事が主で、そんなに毎日変化しているわけでもない、いつも同じようなことばかりになる。それはそれで良いと思っている。時々変わったことがらがある。その日だけ書こうとすると億劫になったり忘れてりする。やはり習慣付けが必要なのもかもしれない。後になってみても、そのとき何を考えていたか？ なにを悩んでいたか？などはあまり書いていない。何をしたかが中心である。ただ、行動の仕方や表現の仕方その時の幼稚さの程度が推察できる。いまも当時とそんなに成長しているようにもみえない。やはり人間そう変わらないのかもしれない。

書くことに抵抗感はないし、むしろ書き記しておこうという気分になる。そんな1日1日が48年間になったのだろう。めったに読み返すことはないが、これからも続けようと思う、なんの抵抗感もないし、負担にもならないから。この自分史みたいなものを綴ってみようと思ったのも心境は類似しているのかもしれない。いずれにしても全くの凡人のすること、大して構えるものでもないし、大した成果物ができるわけでもない。

ここ5年間では殆ど毎日つけている。生活の中に特段変化はないけれど、時間がありあまるほどあるため、むしろ楽しみのひとつというか、生活のリズムになっているとも言える。花畑 work のこと、ぶどう塾のこと、囲碁の対戦結果、緑地散策、公民館での出来事、パソコン work、孫と遊んだことなど同じことの繰り返しのよう気さえする。4～5行/日で、昔は当用日記帳などを使っていたが今では厚紙表紙の普通のノートで十分だ。

そういえば、今度同窓会で荒金さんに会う機会があれば私の日記のことも、まだ彼が続いているのか否かも聞いてみよう。あまり見ることのない格闘技 (K-1、PRIDE、ボクシング etc) のDVD録画をして保存しておくのと似通っているのだろうか？

私が寮でお世話になったのは、通算6回で実質5ヶ所の寮生活である。

- 1.入社時の六甲台神鋼寮（鉄短大から帰った後3年含む）・・・・・・・・ 6年
- 2.鉄鋼短期大学 青雲寮・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2年
- 3.中近東 バーレーンでの現地工事（キャンプ=板場）・・・・・・ 1年
- 4.東京本社 清澄寮・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2年
- 5.海山鉱業時代 神鋼甲南寮・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2年 合計13年

高校を卒業して（集団就職ではないが、そんな時代）関西汽船、別府棧橋から瀬戸内航路で神戸港まで13時間一人で神戸まで出てきた。うぶな18歳、まだ学生服を着ていた。神戸港からタクシーで六甲台神鋼寮まで連れてきてくれたのは大分工業高校の先輩、伊東さんであった（100メートル日本記録保持者、伊東浩司の父）。始めて見る神鋼の寮は近代的で素晴らしかった。高層住宅・冷暖房あり・食堂・娯楽室完備・洗濯場・お風呂は共同で明るい。六甲山の山腹にあり景色、神戸の夜景も good、こんなところで生活できるなんて・・・気分が良かった。まさに、神戸にふさわしい所であった。寮食も良く、先輩ばかりだが新入社員を含めて150人くらいだったろうか。6年間いて、同室になった人は時間順に形見、林、山口、平川君の4名だ。2棟411号室忘れもしない。松井君とはいつも卓球をして遊んだ。

次は、鉄鋼短大青雲寮、尼崎？伊丹？昆陽の里にあった。六甲台神鋼寮の明るさと比べて雲泥の差がある。暗く・狭いように感じた。2年間で2室変わった。同室は山下さん、次が山本徹明さんだ。特に徹ちゃんと一緒に2年の時はクラスの娯楽室をよばれてみんなが、しょっちゅう遊びに来てマージャンをよくした。私がきれい好きでないので部屋はきたなかった。自分でも感心するのは、せんたく紐に洗濯ものが干しているだけでなく、夏に敷いたゴザが正月すぎてもしいてあり、ゴザの上には土の一部（多分野球練習のあとユニフォームで誰かあがったそのままになっている）やゴザの切れ端が残っているような状態だった。よく虫がわかなかったものだと思う。いずれにしても勉強・野球・旅行など学生時代の住家であった。

それから17年後、海外勤務で1年間中近東バーレーンというところで、アルミ圧延工場建設プロジェクトに参加することになり、建設現場の近くのキャンプでの生活が始まる。もちろん単身赴任である。これが3番目の寮生活といえる。とにか

く暑い国だから昼も夜もクーラー着けっぱなしである。仕事開始が朝7時だったと思う。朝食後バスがキャンプから建設現場まで4便ほどある。いつも2番くらいのバスで行く(6時15分)毎朝ラジオ体操と、安全訓話がある。訓話は自分らが交代でやる。定時は17時だが19時くらいまで残業するので毎日11時間はたっぷり仕事をする。その後は毎晩宴会か、マージャンだ。キャンプは浜辺にある。海外を渡り歩いている職人さんの中には、いろんな分野で達人がいる。蟹とり、魚とりの名人にまかせておけば毎日カニ鍋、魚鍋が食える。こんなことは経験したことはない。場所といい、メンバーといいとてもラッキーであった。そのかわり、私はいつもビールを差し入れしていた。これホント、何故かというとな職人さんは現地では安い給料しか渡していない(神鋼が)。それは沢山渡すと現地で遊びまわって身上をつぶすからである。日本には奥さんも子どももいる。そんなことで、私は国内・国外双方で給料をもらい潤沢な金をもっていった。わたしが幹事で早朝ソフトボールも開催したこともあった。40℃になる前の(会社に行く前の時間帯)朝4時半から5時半までトーナメントで。

そしてそれから10年、次はやはり東京での単身赴任、神鋼清澄寮である。ここは管理職専用寮でいろいろな面で格調高い。特に食事が豪華だ。毎日レストランで日本食を食べているみたいだ。朝食でも家の夕食くらいのメニューだったようだ。郷子も喜日子も寮に来て食べたことがあるが本当であることは承知している。場所は地下鉄・東西線の門前仲町駅から歩いて10分仙台掘川の近くだ。会社がある江東区東陽町のコベルコビルまで歩いて25分。途中、木場公園で四季折々の花・樹を観察しながらの通勤は最高であった。この寮に在任期間中に、毎晩、東京の植物園・公園を調べて、散策計画を立て、休日になるとここをベースキャンプみたいにして東京全区、近隣の市、神奈川・千葉・埼玉の植物園・公園を散策した。もちろん本業のコベルコシステムでの東京都内のシステム営業や千葉市川の神鋼海運市川サービスセンターのシステム開発業務もここから2年間通勤した。

最後は、やはり今から10年前になる1996年から1998年までの2年間、神戸市東灘区の神鋼甲南寮だ。ここも管理職専用寮であった。三木から宝塚の海山鉱業に通うのは遠いので、出向時の条件ではないが(海山に寮がないため)ここから通勤した。海山へは、気の進まない出向であったし、神鋼との関係維持の気持ちをいやすのに、この寮からの通勤は私にとってある意味で救いのような役割を果たした、

結婚して5年くらいを新婚時代というのであろうか？、それとも第1子ができるまでを言うのであろうか。いや自分がそうだと思う期間なのか。

1970年ちょうど大阪万博の開催中の4月、別府カトリック教会で結婚式をあげ、亀川の旅館で披露宴。新婚旅行は南九州、宮崎—鹿児島—熊本を回って別府鉄輪で1泊して、関西（兵庫伊丹）へ帰ってきた。南九州を選んだのは、九州出身ではあるものの子供のときは、他県に行く機会はないし、関西に来てから九州は遠くなったし、行ったことが無かったからだ。それと式の場所との関係も便利だったことからだ。いまはやりの海外旅行なんて、思いもしなかった。新居は、伊丹市南本町2丁目の文化住宅で、2階6畳3畳2部屋だった。ここも2～3週間かけて、やっと探したところである。当時、大阪・神戸双方に勤務があったのでその中間の街に・・・と考えたのだ。阪急新伊丹駅から歩いて8分くらいか、住宅地とっていいだろう。高級・・・ではない。まだ、結婚のための休暇中だということに上司・守屋さんからアパートに電報が来ていた。「4月10日出社して下さい、芦屋研修所に、GPSSの教育を受講せよ」との事である。

そんなことで、新婚といえども仕事に占める比重はかなり高かった。ただ、この4月というのはそれまでの大阪でのプロジェクトが終了し、次の仕事の切替時である。ゆっくり出来る時期であったことは事実だ。次の仕事というのがこのGPSSの先生をせよとの事だった。そのためにこの講習を受けた。次回の研修会開催まで、そんなに期間はなかった。先生をするには熟知していなければならない。会社でも、電車の中でも、新婚のアパートに帰っても、勉強・勉強の連続だった。英文のマニュアルをずっと読んでいた。

仕事が終わったら、すっ飛んでアパートに帰っていた。急いで帰るので小雨のとき、自分の傘をどこかの豪邸の生垣に引っかけこわれたこともあった。このことが後々まで会社で笑い話として持ち出されることが再々あった。「矢田さんは新婚時代、喜び勇んで家に帰る途中、急ぎすぎて傘をどこかにひっかけ・・・」なんて。アパートでは夕食後は近くの公園や、伊丹の街のほうへ散歩に行った。休みの時も伊丹の街へ行くことが多かった。当時はボウリング熱で、ボウリング場で人がやっているのを見たり、喜巳子と2人ですることもあった。そして伊丹の公衆電話から亀川の実家に電話したり、関西スーパーの体重計で計測していた。アパートの自室に電話はなかった。今では考えられないが、それ

が普通であった、そんな時代であった。

3ヶ月くらいして、夏休みに佐渡島に旅行した。佐渡では、海水浴をし、金山を見学したあと、二つ亀、なんとか亀など・島巡りをして、ドンデン山の頂上の国民宿舎で1泊した。ここは会社の知り合いの人の紹介でもあった。新潟か両津でも1泊した。北陸本線で行きか、帰りか 混んでいて長いこと立ち席でいたことを覚えている。

伊丹だと、大阪・神戸の中間だし、甲子園にも近い。当時、久史さんがまだ鳴尾での修業中で阪神電車・阪急電車を乗り継いで伊丹まで時々遊びに来てくれた。私たちが甲子園に阪神 vs 巨人戦など見に行った。西宮球場にも行ったこともある。休暇のときは大阪梅田、神戸三宮、京都などにも出かけた。長女・郷子が生まれたのもこの伊丹の病院であり、亀川のおばあちゃんがお産の手伝いに来てくれた。生まれて1週間まではこの伊丹に住んでいた。

待望の社宅に入居できたのは、その1週間後である。当時は神戸製鋼も若い人が多く、それにみあう社宅の数が充分でなかったのだろう、社宅に入るには待ち行列がいっぱいで2～3年くらい待つ必要があったようだ。西明石の借り上げ社宅に入れるようになった。藤江というところにあり、JR西明石駅より10分程度のところだった。伊丹から西明石までの移動はタクシーだった。2階建てが2棟、1棟6世帯で、計12世帯が同時入居した。やはり、小さい子どもがいるところばかりで、年齢も同世代の人が多かった。その社宅から海岸が近くて夏は海水浴、春はわかめとりで賑やかであった。社宅の広さは7,6,4.5、畳の3部屋プラス、廊下、屋外浴室（後から増築?）・トイレだった。この借り上げ社宅には9ヶ月（1971.10-1972.8）いたに過ぎなかった。この間、小さい子どもはいたが郷子が小さかったので近所つきあいは少なかった。亀川のおじいちゃんとおばあちゃんが揃って来てくれたのはこの西明石が最初であった。

このころ、仕事は人事・労働関係のシステムであり、厚生部門の人から加古川の小さな1戸建住宅の持ち家を進められ、会社融資、一般融資でその物件を購入した。達洋が生まれたのはこの加古川の時だ。郷子がいたこともあり、今度は亀川に帰って生まれた。ここはいわゆる団地の住宅地で子供達も沢山いた。加古川には5年ほどいたので、郷子も達洋もこの時のことを覚えているという。近所の子供達と遊んだことも。

次に、加古川から北東、明石のま北三木市へ変わったのが1978年のことである。ここで子ども達は小学校に入学した。結婚してから、10年くらいをかいつまんで記述したことになる。新婚時代とっていいだろう。

私と先生というより、私の先生といったほうがよいと思う。先生の名前を幼稚園から高校3年生のときまで覚えている。大学時代（鉄鋼短大）は担任というのがなかったし、特別、師という関係の人はいなかった。

幼稚園は「さくら組」で担任は、松井先生といって女の先生だった。顔も覚えている。当時の記念写真があるからだろう。まだ、6歳くらいだから60年も前のことである。高校時代に知ったことだが先生の子どもさんもわたしより1つ下の娘さんがいたようだ。藤川寛ちゃんが付き合っていたのか？なにかのことで知った。私は、小さいころかなり、わんぱくであったみたいだし、松井先生いわく「たかちゃんはいつも校門のまえで、おしっこしていた」と言っていたのを覚えている。

小学校に入って、1年生が土橋（つちはし）先生といってきれいで、おしとやかな、やさしい先生だった。この名前に出会ったのは後にも先にも、これが始めてである。珍しい名前と言えるのかな・・・？。2年生になったときにいたのかどうか記憶にない。今でも記憶しているのは、授業中に川遊びがあり、魚や・カニをたくさん捕まえて教室の水槽に入れていた。それを自慢するために、翌日の日曜日に友達を連れて、学校に行った。ガラッと教室にはいるとビックリ、日曜出勤していたのか土橋先生が自分の机で仕事をしていた・・・。わたしと友達はかたまっていたらどうか、どうしたらよいのやら・・・。先生は私たち2人にやさしく声をかけてくれた。

2年生は、平先生といってすごくベテランの男の先生だった。朝日小学校の先生の中でも年季の入った古株だったようだ。はじめて男の先生だが「こわい」という感じはなかった。3、4年生は佐野二枝先生で、目が大きく色白で美人だった。2年間担任だったが、私が勉強や成績のことは頓着しなかったのだかられたり、ほめられたりなど、印象は特にない。ただ、佐野先生から「隆ちゃんは給食の当番をしなくてよい」と言われたのを覚えている。別に傷ついたわけではないが、今では、笑い話になりそうだ。私は小さいころ、青ばなたらしの、きちゃんい子どもだったからだ。そういえば、鉄輪の富士屋旅館隣のヒロじいさんから「ハナちゃん」というあだ名でよばれていた。それくらいハナタレ小僧だったのだろう。5年生は、やはり女の先生で福村ノブ先生といって私を一番可愛がってくれた先生だ。わたしもそれに答えようと一生懸命頑張った。それは、毎日のように出る、詩・俳句の宿題を誰よりも、一番まじめに提出・発表していたように思う。速見郡大神のひとだったようだ。なんでも今は東京都世田谷区緑が丘にお住まいのようだ。

こうしてみると、私の担任の3人の先生とも綺麗な人ばかりで、当時先生になるには容姿端麗が条件だったのだろうか？、そんな気さえする。

6年生は、相良先生でよく叱られた。ゲンコツをこすり付けられて、痛い痛くないの言うたら・・・！。たくさんの友達と一緒に、夜学でソロバンを習いに先生の家に行っていた。白池地獄の近くだった。それ以外にあまり記憶がない、6年であれば修学旅行、卒業などあっているはずなのに。やはり男の先生は印象が薄いのかなあ・・・。

中学になると担任の先生がいて、教科ごとの先生が別にいる。1年の担任は、最初、糸長先生で、後、矢島先生・大川先生だった。どうして3人の先生になったのやら？、確か最初は2クラスだったのを、途中で3クラスに編成替えたのと、その後担任になった、矢島先生が体調をくずして療養し大川先生になったのだったと思う。なお、大川先生は、旧姓、平松先生とって、和子姉さんの時はそのように呼んでいたようだ。2・3年は三枝先生だ。この先生が私にとって、一番よく面倒を見ていただいた先生だったと思っている。英語・社会の先生で、また、朝日中学はもとより、別府市の風紀担当で、柔道は3段だったようだ。社会科の授業中に映画「風速40メートル」(石原裕次郎 主演)の話しをしてくれたことを思い出す。この先生のおかげで、中学3年生のときはよく勉強し、成績もグングン上がった。これも先生の叱咤激励とそれに答えた私のがんばりだと今でも思っている。3年生のときは別のクラス担任の篠原先生、合原先生、と3人だったが、三枝先生が一番若いのに早く亡くなって非常に残念だ。

大分工業高校に入ってから1・3年は藤侃治先生だ。多分先生としても大分工業高校が始めてだと思ふ。なにせ若かったし、ぎこちなさが残っていた。新米先生だ。それでも一生懸命努力していたようだ。私が言うのもおかしいが、特に、高校3年では、就職指導・相談、企業との折衝があり、生徒は、その活動・試験にまい進する。1対45人の関係だ。3年ほど前に、大分市のホテルで40年振りの同窓会があって27名の出席、プラス3人の恩師の参加があった。その時に、毎年賀状でのご挨拶はしているが、40年ぶりに藤先生にお会いしとても懐かしかった。2年は安東秀一先生で、機械科では有名・ベテランの先生で、おやじさんも、この大分工業高校の機械の先生だったようだ。実習で使っている旋盤はそのおやじさんが作ったといううわさだ。「タッペさん」というあだ名は歴代機械科生徒の間では有名だ。

先生ということで思い出したことがひとつ。会社の上司であり、先輩の中島さんがよく言っていた・・・「人生みんなが先生」と・・・。いつも謙虚に、他人を敬い、ひとの行いを糧としなさいということだろう。心していきたい。

上司にあたる人は数えきれないほどいる。神戸製鋼に入社して配属された本社技術管理部技術管理課は名児耶重役(部長)、井上浩三郎次長、田中琢磨課長、斎藤課長待遇、守屋技手、三浦主事、それと女子事務員の豊村雅子さんたちがいた。みんな上司とっていい。1~2年後に津田さん、尾本さん、榊田さん、光武さん、中島さんらが入社・配転などで、増員された。この人たちもまた上司だ。それは皆さん大学卒だし、私より年上だったからだ。もう46年も前の話だ。

その中から1人ということだったらやはり、三浦章可主事だろう。年齢も45歳くらいだったろうか?、小柄でまじめな方で、親切で係長という立場であった。したがって課の中では影響力があるし、みんなも尊敬しているようだった。反面、年齢がかなりいっていたのでチャカシテいる部分もあったようだ。仕事が終わって帰りはいつも阪急電車で一緒だった。それは三浦さんが西宮北口で、私が阪急六甲だったからだ。残業のときはよく、鍋焼きうどんをおごってくれた。ありがたかった。田中課長がよく「三浦さんが一番金持ちや」と言っていた。確かに、係長だから残業手当はつくし、年配だし。最も高給取りだったみたい、課長以上に。ちなみに入社4~5年頃の私の年収が35万円くらいだったろうか、三浦さんが「矢田君も年収が50万円になったら結婚できる」と言っていたのを思い出す。仕事のことや、人間関係のことなどいろいろの面で教えてくれた。私が1年間、技術員教育に行った後、同じ職場にもどった。その時もいろいろお世話になった。家に遊びに来るように誘われ一度だけおじゃましたことがある。その時はたしか一緒に門戸厄神に行った。娘さんもさそったが別用でこれなかった。その後、鉄鋼短大に派遣され、2年後に同じ職場に復帰したときは既に、教育課への配転でいらっしゃらなかった。念願の課長職になっていなかったようだ。しばらくして定年退職を迎えられた。所属が別の課だったとはいえ、今にして思えば、もっと形ある送別会とお礼をしておけばよかったと悔やまれる。

このようにお一人、お一人ごとに記述すれば何ページあっても足りない……。とりあえず、その後の上司を列挙すると……

- | | | | | | |
|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| ○守屋武治さん | ○光武紀芳さん | ○中島捷純さん | ○小林護郎さん | ○斎藤要さん | ○木村哲夫さん |
| ○吉田利男さん | ○大島義男さん | ○明渡 博さん | ○菅野 さん | ○生野昭人さん | ○今村 弘さん |

○海山 浩さん ○原 三起さん

守屋さんは入社以来最も長い期間にわたってお世話になった上司である。いろいろたくさんの方の指導をいただいた。が、仕事中心の人で、他人・部下の面倒をよくみるタイプではないので、強烈な印象はあまりない、どちらかというと雲の上のような存在だったのかもしれない。ただ、入社で配属された技術管理課が家族的雰囲気でも小規模だった頃、六甲台神鋼寮でリンゴをもらいに守屋さんの部屋に行った（ご出身の長野から送ってくれたのだろう）こと、結婚前奥様の芦屋の実家でのクリスマスパーティーで七面鳥をご馳走になったことなどが思い出される。また、私の会社生活の中で最も印象深い貴重な体験の一つであるバーレーンでの海外勤務の機会を与えてくれたのが、守屋さんであり、今でも大変感謝している。

小林護郎さんは、人事・労働システムの先輩で、そのグループ・リーダーの後任が私であった。加古川の自宅購入の時の保証人になっていただいた。木村哲夫さんには三木の自宅を購入時の保証人であり、本社システム、企画調整Gの時の直属課長であった。温厚で、バランス感覚をお持ちで、気持ちよく仕事ができ、頑張ることが出来た。大島義男さんはエンジでいろいろ教えてくれたし、バーレーン時代の心配をいただいたことが印象に残っている。明渡さん、菅野さんは海外でのプラント建設時の上司であり、同じ釜のめしを喰った戦友でもある。中島さん・生野さんはコベルシステム設立時、システム管理部に残った時の上司であった。どちらかといえばこの時は日陰の時代であったとも言える。いつもコベルシステムに向かって苦言、ねたみみみたいなことをよく言っていた。

みんなより送れて7年、コベルシステムに出向しての上司が今村さんであった。大変やさしく、温厚で、鄭重にあつかっていただき、わたしもそれに応えようとがんばった。いろいろご指導・お世話いただき、とても有難く、頭のさがる上司の一人だ。今村さんを思い出すと、やはり東京時代がよみがえってくる。

海山社長は在日韓国人2世で、いろいろ素晴らしい考え方の持ち主で建設業界や宝塚市にいろいろ貢献し、影響力のある偉大な人物である。反面、裏のある、危険な人物でもあるようだ・・・垣間見られる。原社長も人のいい、阪神タイガースファンである。海山では一番お世話になった。

最後に、やはり、数少ない・ネガティブな経験をし、今でも思い出すと苦い・NO good な時代のことを記さねばならない。1978～1980年の3年間の上司が吉田利男さんだった。

私の今までの転居経歴について、やはり最初は出身地の大分県別府市から就職のため神戸市へ来たときにはじまる。灘区の六甲台神鋼寮が自立第1歩であった。ここから3年間本社に通った。本社は中央区(当時は葺合区)脇の浜町にあり、阪急、国鉄 or 市バスなどで通った。次は尼崎市武庫之荘、昆陽里(こやのさと)にある鉄鋼短大・青雲寮に移った。ここで2年間勉強した。学校との間は200メートル未満なので、学・住一致といったところだ。その後、神戸製鋼の同じ部署に復帰したので、再度以前いた六甲台神鋼寮に戻った。六甲台神鋼寮には結婚するまで前・後あわせ合計6年間お世話になったことになる。

結婚してからの新居は同じ兵庫県伊丹市のやはり阪急沿線で最寄り駅は新伊丹駅である。駅から徒歩8分くらい。ここも新居探しに2~3週間かけて探した。当時、勤務が大阪淀屋橋と神戸本社双方に行っていたので三宮と梅田の間を搜した。家探しに典子姉さんも一緒だった。家賃1万円以下を目標にしたがそんな所はなく、結局月1万3千円のところに落ち着いた。当時は「家と土地」と同じように「質屋」の看板がやたらと多かった。長女の郷子が生まれるまで1年6ヶ月この文化住宅にいた。当時社宅は入居希望者が多く長い順番待ちであったし、新婚さんや子どものいないところはなかなか入れなかった。念願かなって結婚1年半後に、社宅に入れるようになった。西明石の借り上げの文化住宅で東藤江というところで、JR西明石駅から徒歩10分くらいだった。近くの海岸で春はワカメがたくさんとれるし、夏は海水浴客でにぎわう結構よいところであった。

自宅を購入したのは、それから1年後だった。そんなに早く家を購入するなど思っていなかった。いや待ちに待った社宅に入居でき喜んでいたので、ずっと長い期間その西明石の社宅にいるつもりであった。担当していた労働部厚生係の人から紹介・奨められた。場所は、当時爆発的に拡張していた加古川市の郊外に新居を構えた。野口町北野で県立農業高校のすぐ近くであった。まだ、20代なので家・土地とも狭いところだった。でも自宅“持ち家”ということで満足に近い状態であった。難をいえば、すこし日当りがよくないことである。ここで5年間いたが、長男達洋が生まれ、すこし狭くなったので次を探した。

最後はこれも兵庫県三木市、金物で有名な街である。加古川、明石、近辺で探していたが、ある分譲宅地の見学で住宅会社の営業に会い、三木市緑が丘町を紹介され、規模・東南の角地・交通・価格等々の面からここに決めた。30

年前である。住めば都とはよく言ったものでここは本当に気に入ったし、老齢になりなお住みやすくなっている。特に、大型の都市公園がたくさんあり、また、北播磨に隣接しているため、近隣の散策などにとっても好都合である。

ざっと、別府―六甲―武庫之荘―六甲―伊丹―西明石―加古川―三木について記述してみたが、これとは別に期間中、単身赴任時期があり場所は中近東、東京、神戸市東灘区も経験した。それは、1984―85年の1年間中近東での海外赴任、これは、アラブ、バーレーン国でのプラント建設で、居住は建設現場のすぐ近くのキャンプ（宿場）でありバスで5分の通勤であった。歩いて10分のとこだ。次の単身赴任は1994―1995年の2年間、東京都江東区門前仲町、神鋼清澄寮だ。仕事はコベルコシステムで神鋼関係会社のシステム営業と神鋼海運(株)の鉄鋼製品置き場管理システム構築であった。3番目、最後の単身赴任は海山鉱業(株)に出向した時、三木―宝塚の遠距離通勤のため、やはり、神鋼甲南寮であった。従って、通勤は阪急岡本から宝塚（逆瀬川）で時間にして30分程度だろうか。単身赴任は3つとも賄い付きの寮であったのが幸いであったといえる。

再度、順に整理すると

1. 大分県別府市鉄輪（出身地）
2. 神戸市灘区 六甲台神鋼寮
3. 尼崎市西昆陽 鉄鋼短大 青雲寮
4. 神戸市灘区 六甲台神鋼寮
5. 伊丹市南本町 井上文化住宅
6. 明石市東藤江 神鋼藤江社宅（借上げ）
7. 加古川市野口町 （自宅）
8. 三木市緑が丘町 （自宅）
9. 中近東バーレーン国（マナマ）
10. 東京都江東区 神鋼清澄寮
11. 神戸市東灘区 神鋼甲南寮

私の仕事の始まりは、神戸製鋼入社して本社技術管理部技術管理課での品質管理に関する業務であった。もちろん入社してすぐの新人に製品の品質管理が出来るはずもない。毎日毎日事務所で文書を書いたり、文書のコピーをしたりだ。昭和37年当時、デミング賞を受賞しようという全社運動が展開された。東大・京大・東工大等々のQCの専門家からQC指導と診断を受け、それに伴う上司が書いた報告書や会議議事録を清書したり、コピーしたりするのが私の仕事である。これがいやで、いやでたまらなかった。同期入社の人達は製造現場で三交替勤務とか、夜勤をしていた。工業高校卒なので、作業服を着て製品や製造方法などを教えてもらいながら生産現場で働きたいと望んでいた。

1年半後、1年間の技術員教育を教育課に、次の2年間は鉄鋼短期大学へ派遣され、合計3年間勉強する機会を得た。これは大変幸運であった。日本の他の鉄鋼各社の友人にも遭遇することが出来た。ありがたいと思う。

3年後元の職場に復帰してからはコンピュータ関係の仕事に進んだ。最初は、鉄鋼関係の仕事だった。生産計画・販売計画を立案するシステムを担当するようになった。神戸工場（当時）の製品構成、品種構成、工程能力、原価などを入力し、線型計画法（LP）で解析し、最適解に基づいて生産・販売しようとするものである。その頃のコンピュータはIBM1410、つぎがIBMsystem360モデル40だ。灘浜工場で何度も徹夜して使用した。それでも足りずに大阪の日本生命の上位コンピュータを借りるためにタクシーで日夜往復した、神戸一淀屋橋間を。カードケース、マグネティックテープ、プログラムリストを抱えて。この仕事が3年間続いた。他の人からLP：ロングプレーヤと皮肉られた。

1970年に結婚してからは、すぐにGPSS (General Purpose Simulation System) 待ち合わせ型シミュレーションシステムソフトの教育と適用指導であった。主に芦屋研修所が多かった。このGPSSは私自身が教育を受講してすぐに、指導する立場におかれたもので、今考えるとあまりにも無謀なものであったと思う。よく尼崎工場の荷役、港湾設備の作業効率の分析に使用した。

1971年1月からは、私にとって最長の業務である、人事・労働関係システムの担当だ。これも、いきなりリーダーという立場で8年間担当した。全社員の給与計算・賞与計算・年末調整・人事評価・自己申告制度および寮・社宅、各種保険、住宅預金・融資、通勤交通費補助・持ち株制度運用など福利・厚生関係システム等を開発・運用した。ちなみに当時の神戸製鋼の全従業員数は、最高36,000人に達していた（今では、約10,000人）。この仕事の最後のほうは特許管理システムや健康管理システムの開発をした。特許管理システムはまだ、鉄鋼各社にも前例がなく、他のメーカーでもほとんど未着手の領域だった。神鋼が他社に先駆けて実施した、数少ない例だ。

すこし年齢を重ねると、情報システム部門でも企画・管理・調整分野の仕事が回ってくる。部門内の予算編成・全

体システム化計画の取りまとめ、システム教育、鉄鋼他社との関係業務なども4年間担当した。これらは、いずれも本社という立場であるがゆえに、いろいろ苦勞の連続だったと言えよう。

次に担当したのは、エンジニアリング事業部システム部に転属になり、PMSS（プロジェクト・マネジメント・システム）全般業務の担当と中近東、バーレーン国におけるアルミ圧延工場建設プロジェクトでの工事進捗管理システムを担当した。

1987年7月1日はシステム部門にとって歴史的な日であったといっても過言ではないと思う。それは神戸製鋼も情報産業に進出する大きな第1歩であり、コベルコシステムが発足した。この時システム部門の社員殆どがコベルコシステムに出向したが、私は、その中に含まれず神戸製鋼本体に残り、新会社との窓口業務を担当することになった。当時システム管理部に150名いたが、残ったのは10名程度である。しかし私は、本社のキーマンとして、「コベルコシステムの舵取り、育成を」念頭に仕事をした。発足して間もないと言うのに、「糸の切れた凧」のような振る舞いが見られたからだ。5社の情報処理研究会など鉄鋼他社との対外業務も担当した。それはコベルコシステムではできないからだ。3年後の1990年7月システム SWIFT 室が発足し神鋼システム近代化を推進した。この時私は関係会社のシステム推進と全社のシステム教育を担当した。

皆から遅れること7年、私もコベルコシステムに出向することになった。1994年2月である。勤務地は東京事業所であった。最初は田町のリクルートビルで、その半年後、江東区東陽町のコベルコビルに移った。門前仲町の神鋼清澄寮から徒歩20分、都立木場公園を通過して通勤できた。仕事は、千葉県市川市にある神鋼海運のサービスセンタのシステム開発だった。主にJR京葉線で通った。この期間に関西大震災や地下鉄サリン事件があり仕事の上でも大変だった。とはいえ、東京の2年間は公私ともども、とても素晴らしい、楽しい時代であった。

そして、会社生活最後となる海山鉦業㈱に出向したのは1996年8月、郷子が結婚、達洋が就職した直後のことである。神鋼から離れ、子供も独立し、気分的にも非常に楽な状況にあった。海山では、社長付の立場で販売管理システムの開発、会社内の業務・意識改革、ISO14001の導入・取得などあらゆる仕事を担当した。社長が在日韓国人（二世）で、子息・縁者も韓国系の人が多く、また、宝塚における朝鮮人の果たした役割や社内暦の編纂等が結構仕事の中に入って来た。後半1年間は三田の生コンクリート協同組合に出向し、生コンの受注出荷業務を担当した。並みいる土建業の猛者連中との仕事も楽しかった。

神戸製鋼に入社以来約40年、主にコンピュータ・システムの関係の仕事をし、そのなかでいろいろな人にお世話になり、いろいろな経験もした。とてもよかったと思っている。中でも、入社直後の品質管理以後、KOMPBS、人事システム、建設工事管理システム、関係会社システムの関係は特に印象に残る仕事であった。

別の記述で「私と上司」についてふれたが、当然それとは異なる視点となる。それは前者が仕事と直結しているのに比べ、先輩という、やはり私的な面のほうが強いだろうか。兄貴分といったほうが良いのかもしれない。

小学校1～3年生くらいまで、近所で一緒に遊んでくれ、いろいろ教えてくれたのは松屋の広(こう)ちゃんだ。いつも私を連れてまわった。将棋をするにも、野球をするにも、六荘園に泳ぎに行くにも、山に行くにも……。でも広ちゃんが中学校に入ってから遠い存在となった。それは広ちゃんが野球部のキャプテンになり、優等生であり、生徒会長になり、その活躍ぶりを耳にして敬遠するようになった。別府鶴見が丘高校で超成績優秀でしまいには東京大学法学部に現役でパスした。近寄りがたくなつたし、別世界の人みたいになり、遭うこともほとんどなかった。

わたしが中学校で野球部に入ったのも広ちゃんの影響があったからだ。私が入部したとき、3歳上の広ちゃんは卒業していなかったが3年生に、内藤さん、安部さん、末滝さん、瀬戸さん、竹下さん、荒金さん……がいた。広ちゃんの1年後輩であり広ちゃんの話もよく出た。1年先輩の2年生には吉田さん、由川さん、篠原さん、阿部さんなどがいた。3年生のチームは強かったが、2年生と私らの学年のチームは強くなかった。

高校に入ってから先輩は、とても怖かった。特に運動会の競技練習、応援の練習のときである。集まりが遅い、整列がちゃんとなっていない、声が小さい等々で、それこそムチや棒で殴られる。(機械科実習に使う鍛造の)定盤の上にすわらされるのもつらかった。工業高校の後輩鍛錬は定評があった。1年入学時最初の日、ホームルームの前の時間にはドギモを抜かれた。それは5～6人の生徒が大声で、ドカドカと教室に入ってくるなり、「お前らあいさつしとるか!!」それもよく聞き取れない大声で怒鳴り散らす。新入生の私たちは何事が起こったのか理解できなかった。それは2年生がやっと、後輩が入学してきて下級生に威勢良くしたかったのだろう。ウップンばらしでもあったのか?今時、こんなことが罷り通ってよいものかと思ったほどである。このような怖い場面は高校在学中いたところにあった。通学汽車・電車の中、地区別(日豊線 上り・下り、久大線、豊肥線、下宿組……)ミーティング、鍛錬遠足、運動会、大分の市街で……。あるときは別の高校の上級生からもやられる。大分高校、平松、大分実業の生徒に。

喉もと過ぎれば……。自分たちが2年、3年生になると下級生に対して、同じようなことをする。「あのおとなしいヤツが後輩をみるとあんなことをするか?」というように変身する。自分もその一人であった。順送りである。

会社に入ってから、大分工業高校の先輩に伊東さん(神戸工作課)、工藤さん(中央研究所)、松尾さん(岩屋工場4機械課)、後藤朝彦さん(設計)らがいた。入社式の次の日の夜三宮で歓迎会をしてもらった。伊東さんは中突堤に迎えに来てくれたし、工藤さんは初ボーナスでの洋服購入の店を紹介してくれたのを思い出す。後藤さんは早く故人と

なられたし、松尾さん、工藤さんはまもなく神戸製鋼を退社してしまった。伊東さんのご子息は、陸上短距離100メートルで10秒00 アジアおよび日本記録保持者の「伊東浩二」である。(北京オリンピック出場の朝原宣治選手でもまだこの記録には到達していない) 伊東さんに聞いたことがある彼自身、高校時代短距離早かったか否かを、答えは「自分も結構はやかった」とのこと。やはり遺伝とか才能も関係しているのだろうか。それと彼は、私がマラソンで機械科のエースで運動会(3年連続優勝)でのポイントゲッターだったことを良く覚えていてくれた。

このほか、会社での先輩で特筆すべき人が松村方雄さん(松ちゃん)だ。彼も45才くらいで退社して、いまではどうしているかわからない。入社後すぐに彼に誘われて、設計の野球チームに入った。昼休み脇の浜公園でキャッチボールをしていたのを見ていて誘われた。当時休みといえば野球づけだった。それはまた、松ちゃんのさそいで西灘チームにも入ったし、向井さんの誘いで神鋼軟式野球部にも松ちゃんと一緒に入部した。そんなことで毎日曜が野球で、ダブルヘッダーのときも結構あった。極めつけは、同時登録している神鋼設計クラブと神鋼野球部同志が対戦があった。

松村さんには、試合前日の金曜日定時後よくさそわれて、三宮に飲み連れて行かれた。行きつけの Snackbar が多かったが、昭和30年代まで活況を呈した有名なあの三宮ジャンジャン市場にも何回か行った。彼は餃子が特に好きで、試合中・練習中にも、においをプンプンさせていた。

神設クラブにはこの他 三木、都田、佐々木、野田、中井、伊藤、賀集、米沢、松宮、中西さんらがいた
(ついでに同年輩で) 松井、大脇、兼貞、三好、竹田、(後輩で尾崎)

神鋼野球部は 八巻、石原、宮路、中平、岡田兄弟、野々村、奥野、溝畑、栗林、村上、岩間、馬場さんらがいた
ちなみに、岩間さんは、昭和35年当時阪神タイガースの投手で身長185cmの長身からのシュートが武器であった。
盛り上がったピッチャウトに近づいてサインの確認する捕手の私が163cmで、それこそ大男と小人のさまであった。
また、溝畑さんは硬式時代神戸製鋼および三菱重工、新日鉄広畑の補強で後楽園球場の常連だった。神設クラブの4番打者賀集さんはその後、神戸製鋼の取締役、関係会社 神鋼テクノの社長となった。

次に鉄鋼短大の時について まづ、会社の先輩では 大空、山中、福浦、佐竹さんらがいた。大空・山中さんは三木緑が丘でも同じ住民であり、町内ソフトボール同好会でも同じだ。福浦さんは演劇部でも先輩だ。佐竹さんは中近東のバーレーン国での建設工事で1年間一緒だった。その時、佐竹さんは神鋼を退社しており、大阪電気という会社を設立して工事業者として派遣されていた。電気工事のチーフだった。鉄鋼短大時代には、私の人生で最大の兄貴分、山本徹明さん(徹ちゃん)にめぐり合った。寮が同室で、スポーツも旅行も麻雀などいつも一緒だった。

現在三木の家の裏と横（玄関前）の空き地というか緑地が合計500坪ほどある。そのうちの200坪を花畑として楽しませてもらっている。裏は2メートルの遊歩道一本をはさんで。私の家が角地であるのでこの緑地のすぐ近い。ここは以前から宅地用でなく埋立地&緑地として開発以降手つかず、草ボウボウの土地であった。（市所有）

私がこの土地に手を付けるきっかけとなったのは、30年前三木に来て3～4年たった頃、庭のびわの木や葉、正月の松飾りを裏で焼いて灰が出来、そこからきれいな花が2～3本咲いたことに始まる。最初は遊歩道沿いに：1m×5mくらいだった。そのうち裏のネットフェンスが破れ、そちらに刈り草や木の枝の焼き場が出来、そこが広がり花が咲き、その種が飛び花が広がる。花が咲くと周りの草を刈る。花畑と花畑の間の草を刈る間に石柵を、通路を作る。それがだんだんと斜面の土地上部に広がっていく。あるときはまた近所の知り合いから珍しい花の種や苗をもらおうとそれを増やす。家の庭に植えていた花・木が増え、大きくなると、外へ移す・・・次第に広がっていった。

花壇の柵について。2000年2月から生コンの仕事をするようになった。三田の北神生コン協同組合だ。工場は宝塚市と神戸市北区にあり、工場に寄った帰りに生コンのテストピースをもらって帰る。花壇用に、これが1年間続くと結構な量になった。また、近所の赤井さんや西田さんが転居する時に自宅にあったブロックを貰ってくださいということで、これもかなりの量だ。ある時は、道路工事、改装のとき点字ブロックや歩道ブロックの残材を花壇や階段に利用した。角地であるので、勝手に自分で名づけた「大学通り、小学校通り、中学校通り」の工事は何回もあった。

玄関前の花壇は、長女・郷子が就職先から帰った時の軽自動車用駐車場所としてスペースを確保したのがきっかけで、それが拡大して、中学校通りの台地下花壇となった。1m×30mはあるだろう。台地の斜め部、上部は、20個ほどの合計30坪の花壇が出来上がっている。花の愛好会が桜の木や花を植えるため、真砂土1㎡を搬入したのがきっかけだ。

今では、双方の緑地の2/5すなわち200坪ほどが花畑になっている。春、夏、秋たくさん、色とりどりの花が次々と咲き誇る。道行く人、犬の散歩で通る人にお礼を言われたり、ほめられたりする。それでまた気分よくする。こんなことで毎日の遊び場（花畑）になっている。池もある、日陰もある、焼き場もある、アクセス階段もある。これらも全部自作したものだ。花に加えて実のなる樹も結構ある。びわ、柿、さくらんぼ、やまもも、しい、なつぐみなどである。びわ・柿は増やしている。さくらんぼは接木している。なつぐみは鳥が種を運んできたのだろう。

私が生まれたのは昭和18年4月22日。父・豊と母・トスの長男として生を受けた。長男とはいえ姉3人の4番目であった。いつか親父に聞いたことがある「はじめての男の子でさぞ嬉しかったろう？」と、しかしその答えは意外であった「そんなことはない」ということだ。それがどういう理由かわからない。戦時中だから、男であってもどうせ戦争にとられる、兵隊に行ってしまうとでも思ったのか？・・・昔は兄弟が多くてもみなが丈夫に育つことは難しい時代でもあった。一番上の姉は生まれてまもなく亡くなったとのこと。その理由は聞いたことがない。昔はよくそんな事があったからだ。時期としては昭和7～8年くらいだろうか、次女が生まれたのが昭和11年だから。

その頃、両親は神戸市の御影あたりに住んでいたとの事。5～6年間ははいたのだろうか、そういえば大分ではなく、大阪弁みたいな言葉遣いを聞くことが多かった。親父は小さいころにランプの灯で火傷をして眼を悪くしたようだ。それで、小学校の時から盲学校に通い鍼灸業をしていた。長男であったが実家の農業は弟・次男にまかして、関西の方へ修行を兼ねて働きに来たのだろう。あるいは祖父母とおりが悪かったのかもしれない。そのあたりの話を私は知らない。姉は知っているかもしれない。わたしより7歳も上だから。とにかく昭和の初期というか、戦前というか神戸御影、住吉、石屋川、新開地の話はよく聞いたように思う。新開地のにぎわい・しゅうらく館・神戸風水害のこともよく覚えていたようだ。長女・次女は神戸で生まれたのだろうか？、三女と私は別府で生まれたのは確かだが。

男の子の私は、ヤンチャというか腕白というかおとなしい子ではなかった。よく友達とも喧嘩をした、年上の子とも、年下の子とも。今でもよく覚えている、浅井のカッチャンとよくケンカした。彼は学年が1つ下なのだが強く、私のほうが分が悪かった？ 1学年下はいつも集団でかかってきたようにおもう。

上の姉の記憶は私が中2の時に結婚して、大分の方に嫁いだ。大分工業高校から春日町、勢家の新婚家庭に時々遊びに行った。義兄が映画館で仕事をしていた関係で映画もよく見た。新東宝の映画だった。その姉の結婚式に私は出席しなかった。それは別府球場でプロ野球オープン戦毎日 vs 西鉄を観戦に行ったからだ。それほど好きだったのか？あるいは、その当時ではプロ野球オープン戦は一大行事だったのか？。荒巻・別当・土井垣や中西・稲尾・豊田の時代だ。

次の姉は、高校には行かず、洋裁学校に行った。5～6年くらい行ったのだろうか、私の高校時代と同じなのでバスで一緒になったこともあるし、生活リズムも似通っていたように思う。結婚して山口県の防府市のほうに行ったので鉄

鋼短大の春休みに中国地方を旅行したとき初めて寄せてもらった。その後帰省のときに一度、そして一昨年おばあちゃんの葬式の時に行った。今では姉弟といえども集まる機会などほとんどない。

いずれにしても昭和10～18年に4人の子供が生まれて、神戸から別府へ移り、鉄輪に小さい家を買って、私どもを育ててくれた。決して楽な生活ができるはずがない。食料事情も良くない。私が姉弟の中で1番下だったせいか、そんなにひもじい思いをした記憶は少ない。ただ、母親が鉄輪東で畑を借りて、野菜・トマト・さつまいも・大根等々を作っていたことや、秋に塚原のほうに行って栗を拾ってきたり、米を買ってきたり、・・・夜遅く帰ってきたことを覚えている。食糧が不十分で遠くまで行って調達し、子供に食べさせるに必死だったに違いない。

畑仕事で一つ思い出したことがある。姉と私が畑の近くで遊んでいた時、私より1つ上の竹屋の男の子（山本君）とケンカになり、その子が竹切包丁で私の顔を切りつけ頭から血が噴出した。大きな声で泣き出したので母が駆けつけ300メートル離れた坂の上の渡辺病院に運び込んだ。5歳くらいだったので抱えて走るにはとても重かったと思う。傷は頭から額にかけて8センチくらいだった？、目にいたらなかったのが幸いだった。今思い出してもぞっとする。その傷跡は幼稚園の卒業写真や小学校の記念写真では高学年まではっきり映っている。60年たった今でもあとが残っているのではないだろうか、40～50年見たことはない。

いずれにしても、終戦後子育てに必死だったと思う。大変だったと思う。どこの家庭だって同じだろう。みなそうしてきた。姉2人が嫁ぎ、私が神戸製鋼に就職して両親がやっと一安心出来るようになり、楽になったことだろう。そんな苦しい生活の中で矛盾するとか、理解できないとか、・・・上の姉が小さいころ日本舞踊を習っていて、よく発表会や演劇祭などで踊りをしていたが、これには結構な出費があったのではないだろうか？ そんな余裕なんてあったはずがないと思うのに。近所の人々が日本舞踊に行くのでミエで行ったのだろうか？

「私と上司」について書いたことがある。今回は私と後輩（一部同僚）にふれてみたい。一時期、リーダーとか指導する立場となったこともあり、その時のことも少し含まれる。また、同僚のことについても……。どちらかといえば、私は後輩の面倒を良く見るほうではなかったかもしれない。いや普通だったと思う。自分では、多くの同僚・後輩・部下に親しまれたと感じているから。

やはり中学生時代、野球部で1年下の後輩の人々の名前と顔は5～6人ほど浮かぶが、2つ下だと全く出てこない。先輩の場合は1・2・3上でもよく出る。どうしてなのか、普通なのだろうか？会社の野球部、鉄鋼短大の野球部の場合でも同じようなことが言える。年下のものでも技量が上手な人は良く覚えている。それだけライバル意識があったのだろう。

仕事の上ではどうか、長い間神戸製鋼に勤めそのあと、コベルコシステム2年、海山鉱業5年の会社生活であったがその中で神鋼時代から……。大分工業高校の後輩が何人かいる。1つ下で、船越・大野さん、2つ下は後藤さん、3つ下は広島・広瀬・村井さん、それより下で内田・安東さんなどだ。広島・安東さんは長い間システム管理部と一緒に仕事をした仲だし。よく知っていると言って良い。人事労働関係の仕事も一緒にした。今年の5月1日には15年ぶりに三宮のOB会で再会した。同じ職場にいた安東さんについて、今でもなんとかならなかったのかと後悔していることがある。それは、当時彼が共産党系の活動をしていたため、会社からマークされていた関係上、仕事以外のプライベートで飲みに行ったり、レクレーション活動を一緒にしたとか、他の職場の後輩とともに自宅に招待したことなどがなかった。今にして思うと、そのことに関して避けて通っていたようだ。もっと相談・話し相手などになれなかったのか、私のほうから助言・指導や交流の場を設定することができなかったのか悔やまれる。広島・安東・矢田の3人が幹事で大分工業高校出身者の同窓会（神鋼豊工会）を開催したときみたいに。

広瀬さんは入社3年目の1967年神戸大水害で都賀川に流されて死亡している。また、村井さんは1989年藍那の交通事故で亡くなった。自分の運転していたバイクが雨の県道でスリップしたのが原因だ。彼も、同じシステム管理部の隣の部署P室でプログラムの研修生であった。緑が丘駅から通勤していた。そういえば、村井さんと同じP室のプログラム研修生で緑が丘から通勤していた下田さんも次の年亡くなっている。まだ40才前半であった。お葬式の場所が神戸市西区あさひが丘の公民館だったのも村井さんと同じだ。2年連続で。

後輩・同僚で一番印象的なのはやはりシステム管理部人事・労働グループの面々だ。前出の広島さんのほか、板谷、村上、長谷川、成田、高木、長田、岡崎さん、その後3～4年間で、青木、鈴木、竹林、梶本、白浜、志賀、能勢、牛草、竹中、大前、藤田、茶石、藤、大川さんらが加わった。この時、私が最年長で結婚していたくらいで、あとはみな

独身者であった。私も含めて、周りは若い人ばかりで仕事も、遊びも澁刺としていたし、楽しかった時代である。

エンジニアリング事業部時代は、多少の上下関係はあったものの、後輩というより同僚として捉えたほうが自然のような気がする。それぞれみな個性のある、優秀な人たちばかりであったように思う。私がエンジでは後輩になることもあって皆さんからいろいろ教えてもらった。年齢でみると似たりよったりであった。24・5年前のことである。名前を列挙しておく、中林、三宅、暮石、石田、森田、友野、都、浜田、河崎、後藤、フェルプス、北島、藤本、加世堂、渡辺、丸山、吉田順一、そして女性で中村、藤田、吉田正さんらだ。今では彼等とは全く交際・交流はない。ここに3年間いたが、大山登山や山荘でのテニスをしたこと等がよい思い出である。なんでも女性の中村さん今では、アルテミス日本の社長であり、通産省のプロジェクト管理理事、早稲田大学での教鞭等第一人者として活躍している。当時はどちらかといえば美人の女性事務員くらいの印象であったのだが

コバルトシステムができ多くの部員が出向したあとに残ったシステム管理部のメンバー・同僚らも印象的だ。なにか残された隊員達のような感じで、どこに目標を定めたら良いのやら不確かな、不安定な、そして暫定的な組織・集団でもあった。でもお互いそれなりに頑張った。生野、矢田、玉木、林、井原、鈴木、中野、松井さんたち、および（運動専門団で、野球・江坂、宮永、山崎 バレー・村上、大久、陸上・辻本、橋本）女子事務員に梅村、札幌さんらだ。プログラム開発技能を修得するために他の部門から転籍した森、高寄、山辺、久保さんたちほか30人の室員で、雰囲気的には明るく、家族的な、言い換えれば学校的な職場とも言えた。特筆するとすれば、村上さんはバレー日本リーグで活躍した選手であり、江坂君は平安高校・神戸製鋼のエースとして活躍し都市対抗野球にも出場、プロ野球、近鉄・阪神で5シーズンくらい活躍した。当時、「仕事はほどほどに、そのかわりドラフトには声が掛かるように頑張れ！」と言っていたのを思い出す。もちろん、震災前であるから、陸上長距離は関西ではNO.1だったし、バレー、野球とも、ラグビーにひけをとらないくらい好成績をおさめていた。

あとさき逆になったが、高校時代には後輩にあたる人はいなかった。クラブ活動をしていたわけでもないし、下宿していたことも、ボランティアやアルバイト、趣味の活動などもしていなかったし・・・そういえば高校時代は何をしていたのだろう。ここで記すことではないが別府の田舎から大分市内の学校に一生懸命に通学してただけで、それ以外は何もしていなかったようだ。鉄鋼短大の時代はやはり野球部と演劇部に後輩はいたが、とりあげるほどのことはない。。

やはり後輩ということで見ると特段記述することが少ないという事は私に年下の人との関係構築に難があるのか？人の面倒をみるという気質がないのか、苦手なのかな？

後輩・同僚リストなるものを別表に記す。（記述していくうちにその幅がひろがり、仕事を一緒にした人となった）

部署名

年次

(021) 付表

一緒に仕事した人達 (敬称略 順不同)

2008.07.30

技術管理	1962-1967	名見耶重役、井上浩三郎次長、田中琢磨課長、斎藤課長待遇、守屋技手、三浦主事 豊村雅子事務員、津田さん、尾本さん、榎田さん、光武さん、中島さん 石田 三浦
設備管理 P I	1962-1967	(村井) (尾崎) (原田) (名倉) (松盛) (松末) 広瀬 船引 杉野 大喜多 小西 浜田 名倉
KOMPBS	1967-1970	栗木 吉田 福光 鷹津 三枝 黒岩 大島 山口 友野 奥野、小沢、村岡、大田
情報センター	1970	守屋 鷹津 小出 加藤 池澤 坂田
人事・労働	1971-1982	小林 広島、板谷、村上、長谷川、成田、高木、長田、岡崎、青木、鈴木、竹林、梶本 白浜、志賀、能勢、牛草、竹中、大前、藤田、茶石、藤、森、大川 (運営G)佐藤、布施、安東、村上 楠本、脇本、佐藤
経 理	1980-1982	中司馬、大西、岡本、松本、神村、辻、増井、 林、東
企画調整	1983-1984	木村 水谷 佐野 吉田 小島 佐藤 岡本 今井 樋口 松原
エ ン ジ	1984-1987	守屋 大島 中林、三宅、暮石、石田、都、森田、友野、浜田、河崎、後藤、 フェルプス、北島、藤本、加世堂、渡辺、丸山、吉田順一、中村、藤田、吉田正
パ ー レ ン	1984-1985	田中伸 松岡 中山 寺尾 竹内 鈴木 宇野 土居 友広 池田 山形 明渡 菅野 尾崎
シ ス 管理 II	1987-1990	生野 玉木 林 札幌 梅村 村上 大久 江坂 山崎 宮永、辻本 橋本 井原 鈴木 森 高寄 山辺 久保 他
システム SWIFT	1990-1994	中島 高橋 小阪 小林 三浦 田中啓 岡本 小島 吉田 苛原 藤本 福井 生野 玉木 札幌 林
IT サービス 東京	1994-1996	今村 西村 高谷 野々原 迫 桧原 山崎 峰峯 奥主 鎌田 横山 平野 堀川 (関西) 矢野 上高原 酒井茂 牛尾 森田 他
海 山 鉱 業	1996-2000	海山 原 北尾 坂本 荒井 海山 板屋 進藤 樽本 柳本 大前 石井 内藤 大北 大湾 三宅 滝谷 服部 杉沢 永田 中山 朴 田中 矢原 藤本 藤井 竹中 片山 植木 須藤 日高 宮本 綾城 (具) 北中 中村 西本 谷本
北 神 協	2000-2001	北村 松本 杉原 荒田 東元 赤峯 朝井 歳内 尾崎 前川 堀川 古東 下川 永尾

カンチロ会：その名前は誰が付けたのか？なんの会なのか？ みんなで決めた名前だ。鉄鋼短期大学第4期機械工学科卒業生のクラスの名前である。1967年2月、修学旅行みたいにクラス全員で白浜温泉に出かけた。そのバスの中で話し合っただけで決めた。この短大時代「ちんちろ かんちろ 学校サボって・・・」の歌があった。機械科の応援歌か愛唱歌のようなもので、いつも歌っていた。そこから来ている。従って40年にもなる。そういえば昨年2007年に卒40周年ということで記念のカンチロ会を私が中心幹事で、有馬温泉（宴会・泊）、神戸市観光・母校訪問をまじえて開催した。これで8回目となる。日本各地の開催をめぐり一巡して再度関西へもどってきた。

卒業当初、第1回は1970年万博の時にやる、あとは10年おきに開催するということがスタートした。第1回目の時はまだ独身者が多く、既婚者は7～8人だった。第2回は神戸海洋博覧会の時にした。第3回目からは日本各地でしようということになった。名古屋オリンピックの年、それは1988年の予定だったがオリンピック開催は韓国ソウルにもっていかれたが、予定通り開催場所は名古屋で1989年であった。幹事は愛知製鋼の中井さん、佐藤さんだった。その後の予定は都度きめる方式で、次は西の方で広島ということになった。声の大きいほうが勝ち・・・ではないが、とにかく参加者皆で話し合っただけで決める。広島は日本製鋼の楠原さんが幹事、それと呉の杉林さんも手伝ってくれたようだ。広島の時は徹ちゃんの墓参りに行き、少し安堵した。それは亡くなってから20年も墓にも、仏様にもお参りしていなかった。このときは徹ちゃんの奥様に連絡し向之原まで一緒に行った。そして実家のお父さんに昼膳をご馳走いただいた。親戚の方たちもみえていた。

4回目は九州でということになった。それも3回目から2年後だ。これは広島のとくに久しぶりに出席した西村さんから「これから10年毎では・・・年齢もいったし2年毎にしよう」との提案で、白羽の矢が石田さん（新日鉄八幡）に飛び場所も決まった。しかし九州は実質的に住金小倉の小野さんが主幹事で開催された。おいしい魚料理を堪能し、大宰府や門司博にも行った。私はこれを利用して別府に帰省し小・中の同窓会にも参加した。ゆっくり休養をとっていたが、丁度 孫、拓・美紅（双子）が生まれ、てんてこ舞いの三木によび帰された。

九州まで行くと西も南もないこれ以上端はない、次は北海道ということになった。日本の最北の地である。室蘭の渡辺さんが手を上げ洞爺湖でセットしてくれた。火山の噴火あと、噴煙、すごい地殻変動も目の辺りにした。行きも、帰りも（住金）和歌山の杉本さんと同じフライトで奇遇だった。このときはじめて家内も同伴したのだが、函館・大沼公園・駒ヶ岳などにも行きとてもよい旅行ができた。私の他に奥さん同伴者は5～6組いたようだ。宮川（NKK新潟）さんは犬まで連れてきていた。

次はやはり日本の首都がある東京は欠かせない。西本さん（新日鉄君津）、西村さん（住金鹿島）、河瀬さん（NKK）が骨おってくれた。結果は、日本の温泉ベスト3に入る熱海での高級ホテルだった。熱海の海岸や十国峠なども散策した。

私は植物園に好んで行くが、カンチロ会の時も名古屋では明治村、広島では広島植物園、そして九州でも、北海道でも、熱海でもそんなところを散策している。これも楽しみの一つだ。

いつ頃から一杯会と言うようになったのか？年に1度は必ず5人が集まって会食をする。メンバーは吉田義明さん、今村さん、中島さん、吉田順さん、そして私である。確か私が海山鉱業に出向してすぐくらいからだからもう10年は過ぎている。

メンバーのつながりは、吉田義さんと中島さんは KOMPBS&加古川&アルミ銅でのつながりであり、今村さんと中島さんは同期入社、吉田さんと今村さん加古川時代&九州大学の先輩&後輩、コベシス時代の本部長・副本部長の間柄だ。私と中島さん、吉田さんは KOMPBS 以来&システム SWIFT、そして関係会社事業部等々お互い関係している。

吉田順ちゃんを除いて皆さんお酒を結構いただく。順ちゃんはお酒は飲まないが人付き合いが上手でこの種の付き合いもあちこちに参加しているし、鉄鋼販売システム関係 OB 会の世話役でもある。吉田義明さん、今村さんとも紳士だし、中島さんも含めて格調高い内容の話題が多い。やはり大卒、九大・京大のことはある。例えば、歴史とか宗教、政治・経済・経営などである。そんな話題になると吉田順さんと私は聞き役だったり、チャカシたりである。もちろん神鋼時代一緒に仕事をした時の話や、近況などもたくさん出てくる。にぎやかで楽しい。

どうしてか今村さんがいつもセッティングしてくれる。私自身悪い気がする。今村さんが神鋼社友会（神戸製鋼管理職 OB 会）の理事になったこともあり、ポチポチ私のほうでバトンタッチしなければならないと考えている。一度中島さんに相談してみようと思う。

この一杯会のはじまりについて、ひそかに私自身が感じているのは、私が辞退したにも拘らず海山鉱業に出向することになり、吉田順ちゃんも神戸ポルフという神鋼とあまり関係のない会社に出向し苦勞しているのではないかととの配慮からの慰労会めいた意味合いがあったのではないかと考えている。それがお互い旧交を温め、情報交換の場が変わっていったと感じている。1年ほど前吉田義明さんが入院して以来、開催を見合わせている。これがスタートした時は中島さんの住まいは六甲アイランドだったが、退職後石川県小松市にUターンし開催の都度神戸に出かけている。

私がパチンコを始めたのは高校3年生の冬、例によってデコさんとこ別府・明礬温泉・えびすやに皆が寄って酒飲んだり、麻雀したりしだした時だ。タバコもこの頃から始めた。高校生活は殆ど勉強らしいものをしてなくて遊んでばかりしていたが特に卒業前3ヶ月前くらいからは外泊するし、徹夜するし、酒・タバコ・麻雀と本当に不良まがいの遊びを覚えた。中学時代の明礬の友人と別府鶴見が丘高校（デコさん）の友人らが毎日えびすやに寄った。

会社に入ってもやはりパチンコ屋通いをした。当初はあまり勝つことはなかった。それでも中毒みたいなもの、面白くて止められなかった。夜遅くまでパチンコ屋のタバコの煙の蔓延する中、健康にも悪いだらうに・・・軍資金が無くなり質屋に行き金を借りてまたパチンコ屋に戻ったことも度々ある。初任給で買った大事な腕時計や、寒さをしのぐオーバ・コートなど何回出し入れしたことだろうか？ 当時質屋の金利は月9分であったが今はどれくらい？

1965～1967年の鉄大時代は野球、勉強、旅行等でことでほとんど行かなかった。1967～1970年は勤務が大阪の淀屋橋だったので梅田の東門筋のパチンコ屋でした。1970年に結婚してからは小遣いのこともあり、5年間ほど、そんなに行った記憶はない。伊丹・西明石・加古川の初期の時代に相当する。この頃は人事労働システムを担当した時期であり、プライベートに余裕が無かったし、また、郷子や達洋ができた時期でもありパチンコなどそんな悠長なことをする場合でなかったのだろう。会社資格からすると主査まえの主務1級くらいだった。出世競争の前半戦に相当する。

その後、1975～1984年の10年間、特に後半は人生の中でもよく通った時期にあげられる。神戸三宮・元町あたりで毎晩のように行き、パチンコ台椅子にすわる時、通勤かばんを・背中と腰あたりに置くためカバンに癖がのこり曲がったまま元の形にもどらなかった。それほどよく通ったことになる。この時期、出世競争の点からみると既に主査になっており、次の主幹を目指す大事な時なのにどうしてパチンコなど？・・・・。そういえばこの期間の後半、いやな上司（課長）が赴任し、つらかった時期でもあった。また親父と母親が一時期三木で同居することになり、これも難しく、悩ましい時期でもあった。それから逃避する・・・そんなこともこうした時間の過ごし方になったのだろうか、1985年は中近東への海外勤務だから皆無。

1986年帰国してから今度はパチンコでなく、エンジの先輩森田さんからパチスロの手ほどきを受けそれにはまってしまった。もちろんこちらのほうがずっと面白い、勝負も大きい。場所は同じパチンコ屋である。元町や新開地でした。

それこそ中毒だ。行きたくて、行きたくてウズウズ、当時閉店は22時だが、会社を出るのが20時40分前であればひと勝負できるという時間感覚があった。普段の定時退社であれば必ず先に立ち飲み屋に寄り、ビールや酒を一杯のんでほろ酔い気分でするパチスロは私のハッピータイムであった。これが1986～1994年まで続いた。当時平均帰宅時間が22時を過ぎていただろうか？・・・、もちろんこの中には麻雀日も含まれる。麻雀の日はさらに遅くなり23・24時を過ぎることもあり、三宮・西明石・西神からタクシーで帰宅することも度々であった。タクシーはおろか、急行列車やパトカーを利用したこともある。これは東加古川に在住の時に、マージャンで25時をすぎるとJRでも普通・快速電車とも終電は過ぎて、やむを得ず急行券を買い、三宮駅から急行「鶯羽」にのり加古川で下車するしか帰宅手段がなかったからだ。「鶯羽」のお世話になったのは5～6回はくだらないと思う。そのうち1回は、お酒も入っていたこともあり深夜の国道2号線を千鳥足で俳諧中にパトカー尋問を受けた。身の程知らずと言うか、あつかましいと言うか、下車した加古川駅付近から自宅のある東加古川までのそのパトカーで送ってもらったことがある。「酔っていれば怖いものなし」といったところか。

1994～1996年今度は場所を東京に移しての話になる。この2年間は東京および、近郊の市での植物園・公園めぐり、散策に多くの時間をさき、楽しい時間をもつことが出来たが。それは休日の昼間のことで、ウィークデーの定時後は殆ど毎日、パチスロ通いだっただ（江東区 東陽町、門前仲町で）。時々、新宿、上野、池袋でもすることがあった。従って清澄寮の夕食を欠食する日が多かった。東京での通算成績はトントンだったのか結構勝率が良くて、小遣いが潤沢だったことを覚えている。

私の会社人生ずっとパチンコと共に歩いているようだ。1996年今度は神鋼と関係のない海山鉱業に出向することになったが、勤務は宝塚市、住まいは神戸市東灘区（神鋼甲南寮）となった。やはり、宝塚でも本山でも甲南市場でもやった。ここも単身赴任だったので時間はありあまるほど充分ある。立ち飲み屋で一杯引っかけてするパチスロは生活の中の英気を養う、もってこいの場所・時間であった。最後の勤務地、兵庫県三田では車通勤だったので、あまり立ち飲み屋に寄ったこともなく、パチスロにもほとんど行かなかった。

同じパチンコ仲間、吉田順ちゃんが言っていた「これまでパチンコで1000万円は摩って来た」と。そんなことはあまり考えなかったが、大雑把に計算してみると私の場合でもやはり500～800万円近くつぎ込んでいると思う。

いつから植物好きになったのか？、確かに中学校時代庭園部というのがあってそれに入部していたことはあったが植物や庭園が好きということではなかった。野球部の先生（幸先生）が庭園部の先生であり、野球部の先輩が多く庭園部に入っていたこと、それとクラブ活動の時間に校外の野山に出かけることが出来る。そんなことで自分も庭園部に入ったと思う。たしかにクラブ活動の時間によく明礬や扇山、湯山、十文字原にでかけてはアセビの樹やモミジ、ツツジの樹をとってきた。途中キャンプ場で遊んだり、やえびすや旅館で休憩したり楽しい時間であった。出かける時はいつも牛、牛車を連れて行った。あと高校時代、神鋼入社して、鉄鋼短大の期間思い出してみても植物を意識したことは記憶に無い。

やはり1978年三木市緑が丘町に持ち家してから周りに緑が多く、里山が近くにあり山菜とりやハイキングに出かけたり、山から樹を取ってきたり・・・そんな機会が増えたことによるものだと思う。そういえば三木にきてからすぐの時期里山に入りアセビ、モッコク、ヒイラギ、コメツツジなどをよく取りに行った。その頃から樹木に関心・興味がわいてきた。当時とってきたこれらの樹が30年近くたった今、まだ庭木に残っている。

極めつけは、1994年勤務が東京になったからだ。2月1日に着任してすぐに行こうと思ったのは、茗荷谷の小石川植物園と目黒の国立植物教育園および西部池袋線の牧野記念庭園だ。それ以降休日には必ず出かけるようにした。国立・都立・区立の公園・植物園に合計160ヶ所脚を運び樹木・花・雑草などことごとくメモして学習した。この植物園だけは何回と繰り返して行った。

春夏秋冬に咲く花・草花、海岸に咲く草花、常緑樹、広葉樹、公園・街路樹そして帰化植物などなど、東京にいる期間に植物の名前や性質など多くを学習した。会社のすぐ横に東陽図書館や東京駅近くの八重洲ブックセンターなどの書籍、図鑑などからも吸収した。また、テーマパークでは緑の相談コーナーや花の会などの参加者との交流や教えてもらうことなどもあった。印象的などころを列挙すると新宿御苑、国立昭和記念公園、野川公園、川口ファーマ、横浜子供植物園、堀切菖蒲園、日比谷公園、木場公園（ここは毎日通勤途中）まだまだ沢山浮かんでくる。

単身赴任期間が終わり、関西に帰ってから公園通いは続き、服部緑地、万博公園、鶴見緑地、大泉公園、京都植物園、淡路島でのジャパンプローラなどにもくまなく散策した。歩くことには苦にならなくて家内と一緒に花めぐりはとても楽しい。最近では利尻・礼文の島・花めぐりも大変良かった。行くたびに植物のメモをとっているが大学ノートやメモ帳が何冊にもなっている。ただ、おぼえた草花・樹木も最近では忘れたものがあったり、見てもその名前がすぐに出てこなかったりで・・・。

そんな植物おたくなのか、自宅横の空き地にも沢山の花を植え、それこそ春夏秋冬四季折々の花が咲き、道行く人たちによるこぼれ、ほめて頂くのも気持ちのよいものだ。花畑 work なるものも日課の一つになっている。

1996年7月に長女 郷子の結婚式が終わってすぐの8月、取引、資本関係など神戸製鋼とは全く関係のない海山 鉦業㈱へ出向することになった。最初は拒否をしたのだが、その会社がシステム開発を指向し、その要員が是非必要だとかで。この会社はあの震災復興景気の恩恵で、産廃・生コン・砕石等の土木・建築資材の営業が好調で、その販売管理システムの構築の計画があった。社内にシステムの担当者はいない。これまでは、生コンのシステムの関係で三谷産業が入っており、産廃・生コン・砕石等全体のシステムをコベルコシステムが提案中であった。

神鋼のOBで北尾専務、滝谷、鎌倉さんなどが建機不況の時に神鋼を退職して、行っていた。そのつながりで矢原さん、麦谷さんが先に出向していた。私はシステム担当ということで、役職は社長付、オーナー海山浩社長業務が70%、システム業務が30%の比率であった。とにかく社内の改革が必要で大企業の長所・経験を取り入れることが要求された。新入社ではあるが、神鋼流、矢田流なるものを海山での先輩諸氏に浸透させるべく頑張った。特に最初の3年間は神鋼にもどされることがないように。社長はじめ他の役員・管理者達にも信頼され社内での影響力も大きくなっていった。

今まで経験したことのない仕事を多く経験した。借金の取立て・土地紛争の解決、住民苦情対策、戦後の日韓の関係が込められた社内の歴史編纂、ブルートレイン保養兼研修施設設置、建設廃棄物処理施設建設、ISO14001（環境管理）取得などの業務を担当したのも印象的であった。特に、昭和40年代に寝台夜行列車として活躍し、大阪駅で廃車保管しているブルートレイン2輛を深夜の国道176号線を大阪から西宮の湊谷、蓬莱峡までの大輸送はそれこそ私にとっての「プロジェクト X」でもあった。また、最後の仕事は北神生コンクリート協同組合に出向し、生コンの受注・出荷関係の業務を担当したことも楽しく、貴重な体験であった。通勤は最初2年間は単身赴任で神鋼甲南寮（東灘区）から、あと2年間は三木から宝塚に神戸電鉄・阪急を利用。最後の北神協は三木・三田間を自動車通勤が主だった。

もちろん本業のシステム開発は3年間実施し、宝塚、西宮、箕面、神戸、魚崎浜などの工場にもよく行った。打合せやシステムのインストールとメンテナンスのためである。そのために阪神間の道路、神戸・西宮・宝塚の山間部を社用車でよく走り回った。コベルコが手を引いた今、このシステムはどうなっているのか少し心配でもある。

レクリエーション面では秋恒例のソフトボール大会、夜間工場対抗野球の試合、正月の卓球大会、昼休みの囲碁などがなつかしい思い出である。ISOの取得で一緒に頑張った石井部長、藤本工場長は若くして亡くなったとか、竹中工場長は定年退職（太平洋セメント）し内藤取締役は北海道に帰り、また、北尾専務は宝塚市長&神戸市議汚職で逮捕されたことを新聞で知った……。そのほか 彼らは今、どうしているのだろうか？

自分が公的な資格・免許を所有しているのは「自動車免許」これしかない。それも普通車であり殆どの人がこれを保有しているので、自慢にもなんにもならない。高校時代に計算尺の2級をとったことがあるが、今では計算尺を使うこともないし、使えない。だいたい、高性能の電卓があるのでいまどきこれは必要ない。

結婚して子供が2人でき、加古川に住んで、やはり自動車が必要であると感じだしたのが1977年。会社の資格で社員7級(技師)になった頃だ。たしか6月ごろ須磨浦自動車学校に通うことにした。いつも会社帰り、JR須磨駅からスクール送迎バスを利用した。当時はまだ国鉄と言っていたかと思う。須磨離宮公園、高倉台あたりを横目に見て通り、一般道運転練習はこのあたりから、須磨水族館、板宿の方にも行ったようだ。

34歳くらいだからそんなに年をとってわけでもないが、10代、20代の若者でもない。少し人間があつかましくなる頃ということもあってか？ 運動神経は抜群と自負している自分が都度の運転見極めの成績は芳しくない。結構延長講習の末やっと免許取得ができた。年齢相応の出費、時間がかかった、6ヶ月くらい。学校での待ち時間にプロ野球ナイター中継を見る機会が多かったが、当時阪神の掛布が新人でホームランを量産して頼もしかった時代だ。田淵はすでに峠を越して下り坂であった。

やっと明石の試験場で免許証の交付を受け、すぐ加古川の自宅の近所の矢野さんの紹介で中古車(三菱ミニカ)を6万円で購入した。自宅周辺や工業団地、日岡山あたりを乗りまわった。郷子も達洋も小さかった。よろこぶほどの年齢には達していなかったように思う。1978年加古川から三木に転居したが、新しい家を見に行ったり、引越しの荷物を運んだり、移転の手続き・準備をするのに便利になった。

三木に来て1~2年して、喜巳子も免許を取った。運動神経はあまりよくないのに意外に早く、スムーズに取れた。いつも言われる。「運動神経と運転免許は関係ない」と

運転し始めのときにヒヤッとしたことが2回ある。1回目は加古川の住宅地の小さな道路交差点でいったん停車を怠って四つ角を過ぎた後すぐに別の車が通ったことと。2回目は郷子・達洋を乗せ田んぼの中を走行中少し狭い道に迷い込んでしまった。目の前は一段(2メートル)下の田んぼで、間違ったらそこに落ちる。落ちなかったのが今の自分がある。その後、30年になるが交通違反が1回あるのみで(神戸市灘区でスピード違反)、これ以外の事故・違反はない。

孫のことについて語れる年齢になった。とてもありがたいと思っている。

その子らも今年小学校に入学した7歳が3人と5歳、3歳の合計5人である。最初の孫が生まれたのが2001年でこの年は私の最後の会社生活の年でもあった。4月1日に退職し、洋翔がうまれたのが4月26日。神奈川県産科病院まですぐに駆けつけた。たくさん赤ちゃんがいて、そのなかの一人が洋翔だった。赤ちゃん、母美絵子さんとも元気そうなので安心した。美絵子さんのご両親と食事をしながら初孫の誕生を喜んだ。

そして、同じ年の10月14日男と女の双子、拓と美紅が生まれた。やはり同時に2人ということで大きくはなかった。生まれたとき私はカンチロ会 in 九州と別府での小・中同窓会などに行き、一人で遊びのまっ最中。2人がいっぺんに生まれ、大変忙しい時である。それも一人は退院できたが、もう一人は未熟で保育器の中にはいり、退院できなくて2ヶ所で授乳など新生児の世話に手がかかる、三木と箕谷に離れて。2週後に退院し、拓・美紅と郷子ともしばらく三木の実家において2002年の正月すぎに西鈴蘭台に帰った。

洋翔は静岡からEメールで写真を送ってくれたし、拓・美紅は近くで度々行ったり、来たりで見る頻度は多かった。みんな本当に可愛らしく孫が宝というか一編に世の中が明るくなったような、そんな思いであった。それから次の年、洋翔の妹、小桃ができ、また1年あけ小夢と続いた。男2、女3の合計5人となった。

達洋とこは転勤が多く、東京・横浜・名古屋・静岡・岡山・高松・岡山・と転々としている。そして今年4月からは仙台に変わってしまった。岡山、高松の時は比較的近いので結構三木に来たり、そちらに行ったりで会う機会も多かったが、今回ばかりはなかなかそうはいかないだろう。高松のときは讃岐うどんを食べに行き、栗林公園・金毘羅さん・五色台などに行き写真もとった。岡山では後楽園・岡山城散策や回転寿司に行ったことなどもいい思い出だ。洋翔が三木に来ると必ず里山に行きたがる。おやつ・お茶など持って3～4時間一緒に近くの山をアチコチ歩きまわる。これまで、こだまの森、協同学園、防災公園、三木山森林公園などなどの山に行った。

美紅は来る日も来る日も、一輪車に凝っていてやっとな乗れるようになった。それから1年近くなるだろうか。鉄棒や木登りなども上手で、曲芸、体操系が得意なのか、拓を一步も二歩もリードしているように思う。拓のほうは野球やテニスがうまそうだし、サッカーにも興味を示しているみたいだ。こちらは球技系が得意なのか。

孫のことについて記述したが、こんどはその親、すなわち私の子供のことについてである。子供たちと言っても長女・郷子と長男・達洋の2人である。

郷子が生まれたのは1971年。喜巳子と結婚した翌年の10月だった。最初の子供だけ大分の実家には帰らず伊丹で出産した。亀川のおばあちゃんがお産の手伝いに来てくれた。郷子が生まれた時わたしは会社において、おばあちゃんからの電話で知った。とてもうれしかった。ぼうっとしている時間がしばらく続いたのだろう、一緒に仕事をしていた労働部の新入社員（現：神鋼総合サービス社長）が「自分の子供が生まれるって・・・どんな気持ちなのだろうか」と言っていたのを覚えている。

子供の名前は前からあれこれと考えていた。字画を調べて・・・そのうち頭文字が“K”のつくのがよいと思い「郷子」と名づけた。この名前はあまり見たことないのでよいと思った。生まれて1週間後に西明石の社宅に移った。それはやっと待望の社宅に入居できるようになったからである。当時社宅入居希望者が多く、たくさんの待ち状態だった。乳児もいることだし、伊丹から西明石の社宅までタクシーで移動した。ここも文化住宅で会社の借上げ社宅だった。部屋やお風呂の掃除などもおばあちゃんがしてくれた。この時、たしか休日でプロ野球日本シリーズの最中で、巨人の末次選手の満塁ホームランを放送していたことを記憶している。西明石の社宅には会社の同僚が正月休みや夏の海水浴のついでに赤ちゃんを見に来てくれたこともあった。「色白でとても可愛らしい」と褒めてくれた。私もそう思った。

達洋は1974年3月12日、今度は別府・亀川の実家で生まれた。当然郷子も亀川にいた。このとき従妹の美恵ちゃんも亀川で達洋より何日かまえに生まれたので、うれしいことではあるが亀川は大変だったことだろう。達洋の名前は、郷子の時に候補として考えてはいた。女だったのでつけなかったが、でも改めて、字画等を調べて「衆峰」、「達洋」、「広喜」3つの候補を知らせて、この中からどうかと問い合わせていた。お坊さんみたいな名前は？・・・ということで第一候補の「衆峰」は消え、「達洋」に決まった。亀川から加古川に帰るとき私も帰省し迎えに行った。帰る日が4月22日で私の誕生日だったのを記憶している。お産まえから計算すると2、3ヶ月亀川でお世話になったことになる。たしかこの時親友の本田デコさんの結婚式もあり、それに出席したと記憶しているが？・・・

郷子は伊丹で生まれ、西明石をへて、加古川に住むようになった。達洋は加古川からである。したがって私たち家族全員がそろったのは加古川からである。郷子は加古川の保育園や野口幼稚園に行った。加古川には約5年いた。家族5人が生活するには狭くなったし、将来鉄輪のおじいさん、おばあさんと同居することもあることを考えると、広いとこ

ろに移る必要がでてきた。

郷子が小学校に入学する時に今の三木に引っ越してきた。緑が丘小学校に入学し、3年生から新しく出来た緑が丘東小学校に移った。達洋も緑が丘幼稚園が最初で小学校は初めから緑が丘東小学校に入った。そのあと2人とも、緑が丘中学校、三木北高校と同じ学校に進んだ。幼・小・中・高いずれも自宅から200メートル以内の距離で通学には本当に便利で良かったと思う。

郷子は中学校時代からバレーボールをやっていて、結構がんばりやでレギュラーだったようだ。高校では運動部でなく茶道部とか聞いた。大学は大阪教育大学で入ったときは大阪の池田市で阪急池田駅に近いところだった。下宿もすぐ近くで先輩にやはり三木緑が丘の人もいたので居心地のほうもまあまあだったのだろう。池田への最初の引越しをはじめその後も、ときどき食料や日用品を持って車で行った。当時はまだ山陽自動車道がなかったので、中国道の西宮北インターから乗って池田で降りていた。行くのが楽しみでもあった。3年は大阪天王寺に変わり、常時学校に行かなくて良いということで三木から通った。さらに4年では東大阪柏原と遠く新設の学校に移った。ここでも下宿した。卒業して中学校の先生になったのはいいが三木からは遠い西播磨？福崎の学校であった。ここでも下宿生活だ。2年ほど勤務して、1996年7月に結婚し、今では2児の母親である。男と女の双子・拓、美紅も今年から小学校に入学した。住まいは、北鈴蘭台の松宮台なので近く親子ともどもよく遊びに来てくれる。

達洋は小さい頃から少年野球に入り、親が言うのもおかしいが結構センスも良く活躍していた。同じチームで指導者をしていた私も気分がよかった。その学年のチームは大変強く、100チーム以上参加した大阪府知事杯や北神戸・三木合同トーナメントをはじめ、沢山の優勝旗を勝ち取った。中学でも野球をやり、高校では硬式テニスに凝っていたようだ。

大学に入ったのは皆が予想もしなかった東京都立大学だった。当時私も東京出張が度々あり、入学試験のホテルさがしや合格後の下宿さがしに多摩センターや南大沢あたりによく行った。入学後1年までは東京勤務だったので週末に多摩センターに行き食事をしたあと、下宿でよく花札をした、それも徹夜で、私も元気だったとつくづく思う。大学時代アルバイトかなにか知らないが、三木のほうには殆ど帰らなかった。なんでも信州のほうの老舗旅館みたいところで毎冬・毎夏アルバイトをしていたとか。そして普段のアルバイトは多摩市・八王子市のレストランでしていたようだ。下宿は多摩と藤沢との2回ほど変わったみたいだ。卒業してクレディーシーズンという会社に就職して12年になる。とにかく転勤が多く今まで、東京—横浜—静岡—名古屋—岡山—高松—岡山—仙台と転々としている。2000年8月に東京で結婚式をあげ、今では3人の子供がいる。まさに7-5-3歳だ。

神戸市は第2の故郷といえると思う。社会人になってすぐ灘区、牛小家山という地名にある六甲台の神鋼の寮に入り、会社は葺合区脇の浜（現在の中央区）の本社まで3年間ほど通った。何年かブランクを置いてまたこの本社に勤務した。悲しいかなこの本社も1995年1. 17日の震災でいまは跡形もない。マンション群になっている。灘区は神戸市の中でも愛着を感じる場所である。阪急六甲、JR六甲道駅、水道筋などは特になつかしい。生活の拠点であった。1960年代は国鉄と言っていたし、まだ省線という言葉もよく使っていた。

神戸市には区はいくつあるのか？ 入社以来5年間は野球ばかりしていた。それで神戸の西から東まで、草野球をするために神戸商大、星陵高校（垂水区）、海浜球場（須磨区）、市民球場、荒田球場（兵庫区）、磯上グラウンド（中央区）、大和球場（灘区）、住吉小学校、御影高校（東灘区）、鈴蘭台（北区）などなど。尼崎市、明石市、芦屋市、西宮市、宝塚市、高砂市、姫路市など、近隣の市にも行ったので数は相当なものになる。神戸市民球場、姫路球場、明石球場、仁川兵庫相互銀行グラウンドなどは一級品であったが、学校のグラウンドはそれこそ草野球にふさわしいものだった。北区の大野社のグラウンドなどは、当時山腹を開いた空き地みたいだった。とにかく至る所にかけた。本拠地神戸製鋼のグラウンドは灘区の五毛天神上の野球場と、東灘区御影浜の灘浜グラウンド（今はラグビーで使用）だ。

東灘区甲南町、田中町あたりは2年間くらしした町である。1996年から98年まで神鋼甲南寮で単身赴任をした。宝塚の海山鋳業に通うために。震災直後で公園には仮設住宅がまだたくさん残っており、もちろん住んで生活をしていた。阪急岡本、JR本山、甲南市場がなじみあるところだ。パチンコやほかほか弁当、レストラン、本屋によく行った。

神戸市に住んで40年（実際は近郊の市も含めてのことだが）市内の観光地をめぐることなど少ない。有馬温泉、六甲山、北野異人館、神戸港、三宮界隈、ポータルメント、ルパレントなどが代表的なところか。昨年末の鉄鋼短大の同窓会で出席者の人に案内したのがこのコースである。市内観光バスであるシーレブ、観光遊覧船は好評であった。

神戸市という切り口で記述してみたが、すらすらとでてくるわけではない。あまりにも身近で、かつ対象が大きいのかもしれない。最後になってしまったが兵庫区 新開地あたりを少し。三木から神戸電鉄で出てくると新開地で乗り換える。阪急もしくは阪神および山陽電鉄に。したがってこの新開地は長い間にわたって最も来た街といえるだろう。通勤の途中下車で立ち飲みやパチンコ（パチスロ）にお世話になった私にとってオアシスみたいな街だった。

今でも（現役を終わったので）毎日でなく、月に1回は出てくる神戸だがやはりここ新開地は必ず訪れる街である。昔の聚楽館はボーリング場が変わっているし、通い続けた立ち飲み屋「直江商店」や、びっくりうどん屋は店じまいしてさびしくなっている。でもパチンコ屋やゲームセンター、古本屋などはあいかわらず以前のように賑わいを呈しており懐かしさ、安心感を覚える。今になっては心の古里といえるスポットである。

高等学校入学試験に合格したときは、これまで生きてきて一番うれしかった。そんな気がした。中学校3年生のときに大分工業高校を目指して猛勉強をしてがんばったからだ。入学式の日、母と春日浦の高校へ行き、入学金を納め、教科書と教材（製図機器、計算尺）を受け取ったときのうれしさも忘れられない。

朝5時半起床、朝食の後歩いて25分、別大国道・六勝園を6時40分の電車（大分交通）に乗る。春日浦まで所要時間が30分くらいだったろうか。まだ暗いうちに鉄輪から海岸に向かって歩く、20～30分、最初の3ヶ月は近所の先輩・黒石哲二郎さん（化学）と一緒に通学した。1年生の2学期から汽車通に変えた。起床は同じ時間だが、今度はうかり荘の上の道に集合して、貴船城・日の丸荘・四の湯を通過して亀川駅まで40分歩き、7時21分の大分行き、幸崎行き、鶴崎行きなどの日豊線下り列車で大分もしくは遅くなる場合は西大分駅で下車し学校まで歩いた。いま考えると朝早くから毎日毎日、朝食・弁当の用意をしてくれた母さんには本当に感謝しなくてはならないとつくづく思う。亀川駅まで40分毎日歩いて通った。荒金さん、後藤さん、大野さん、竹林さんなどと。天気の良い日はそれほどでもないが、雨の日などは大変だ。宿題の製図をビニールに包んでティー定期に巻きそれを持って、濡れないよう、転ばないように山道を歩く。いまどきこんな生活をする人たち（高校生）はいるのだろうか？

そんな中、汽車通学は結構楽しかった。ある意味では汽車で通学することは「夢」であった。当時は全部蒸気機関車（SL）だった。シュツツ・シュツツ・ポーや、レールをきしむ音、煙をなびかせ、尾を引くさま、そしてカーブにさしかかった時の連結列車の湾曲、仏崎のトンネルでのばい煙の浸入、等忘れられない光景である。通学は友達みんなとがやがや行けるし、帰り道はAコース、Bコース、Cコースではないが、日の丸荘、平田、野田など3つのコースがあり日替わりメニューみたいにコースを変えて、野原や山道をぶらぶら歩いて帰る。なんと情緒的であろうか。高校の3年間は通学に精力を使い果たして、勉強には、全く力がはいらなかった。工業高校に入ればの就職は心配は少なかった。

それでも、教科は国語、社会（地理、歴史）、英語、数学、物理、化学の一般課程と工作、鑄造、鍛造、原動機、内燃機、材料力学、製図、実習などの機械の専門課程があった。3年になるにつれて専門課程が増えていった。就職活動は3年の5月くらいに始まって9月くらいには殆どの人が就職先が決まっていた。私が決まったのは90人中最後から8～9番目だった。みんなが早く決まっていたため、残された人はみじめな気持ちやあせりなど感じていた。でも、いろいろの会社を受ける機会に恵まれた。わたしが就職試験を受けたのは旭化成と神戸製鋼だ。それ以外にも日立金属、三菱日本重工、やんまーディーゼル、島津製作所など受けるところがいっぱいあった。第一希望の三菱重工や第二希望の旭化

成は不可だった。この話は長くなるので省略する。

成績のほうは中の中だった。1年入学当初は中学のときに勉強をしていたこともあって「上」であったが、時間がたっていくにしたがってだんだん下がっていった。結局、90人中40～45位くらいだった。それと当時の通知表を引っ張り出してみて傑作なのは、遅刻・早退の回数である。1年生のときには全く無かったのに、2、3年になり学期がすすむにつれてそれが極端に多くなっている。遅・早回数が出席日数の1/5くらいに達している。いかに不真面目に登校し、登校しても途中で「さぼる」くせが出てきたかがわかる。高校のときの写真をみても入学時は本当に色白でまじめに写っているのに、三年生の時は帽子も、服のボタンも、ズボンも、靴も不良っぽくなっている。

大分工業高校での特徴は、男子校だけに先輩・後輩のしつけ、あいさつ、けじめ、・・・このあたりがすごい。とにかく2、3年生は威張る。特に運動会の競技・応援練習にはほとんど参る。上級生のしごきがはいる。15～20日間ほどはみっちり鍛えてくれる。怖いくらいだ。自分らが3年生になると同じように下級生をしごく。めぐり合わせである。さいわい、私はマラソンの選手で機械科のエースでもあったので1年生の時から優遇され、上級生からのしごき体験は少ない。各科対抗マラソンに90人（6科×15人）参加して、1、2年のときは5位以内だった。全校マラソンでも360人中いつも10位以内だった。どうしてか早かった。陸上部からの誘いもあったくらいだ。

学校行事の中で鍛錬遠足というのが毎年あった。由布岳に登ったり、大分市から別府市往復（鉄輪巡回含む）とか大分の南海岸歩行などである。このときも通学路別に別れ、例えば日豊線上り、下り、久大線、豊肥線、別大電線組、下宿組・・・等々。そこでまた地域毎の先輩から後輩に対しおなじみの説教がある。でもこの時は反面楽しい時間でもある。仲の良い、矢川君、矢田正道君、鶴谷、深田君、平松君、松本君らとつまらんことをしゃべりながら歩行する。

高校生のときに忘れられないことの一つに、今はなく30年くらい前に廃線となった別府・大分間の電車事故がある。1961年10月だったと思う。その日は洪水警報が出て、学校が早期下校の案内があったほどの雨が降り続いていた。矢川君と私は、これ幸いと大分竹町の映画館にとびこんだ。どんな映画を上映していたかは忘れたが、映画が終わって外に出ると水が腰の辺りまで増水している。大分駅前の電車の線路の上にも。えらいこっちゃ・・・矢川君は兄の家（下宿）に帰れるが、私はどうしよう？ ラジオ放送では別大電車が仏崎の落盤事故で死者が出ているとのこと。国道10号線が不通であれば別府には帰れない。仕方なく、大分駅の列車の中で夜をすごすことにした。丁度プロ野球日本シリーズ南海 vs 巨人戦をやっていたときだ。南海の寺田が痛恨のエラーで巨人が逆転ドラマを演じた時だったと思う。

高校時代はあまり勉強もしなかったが、運良く大企業 神戸製鋼に入社できラッキーだったといえる。

兵庫県で暮らす私にとって伊丹・尼崎は神戸・加古川・三木について印象深い街である。

まづ尼崎だが、どうしてか兵庫県にありながら人々の印象は大阪というイメージが強いのではないだろうか、私もそう思う。なぜか？電話番号の市外局番が06で大阪と同じということ、そして兵庫県の一番東に位置してむしろ大阪に近く、文化圏も大阪よりである。神戸で社会人スタートしたとき3～4ヶ月に一度、休みのときに典子姉さんと共に遊びにいった。姪の尚子が1～2才くらいだった。JR尼崎駅の北東1kmくらいの潮江というところに住んでいた。次に尼崎との関りは1965年に入学した鉄鋼短大・青雲寮が尼崎市北部の西昆陽にあり、2年間学び、遊び、生活したところだ。西昆陽というとむしろ伊丹市のイメージが強いのだが。また尼崎の市役所近くの立花球場には神戸の野球チームや鉄鋼短大の野球部の試合でよく利用した便利の良いところだった。ここでの成績は良いほうだった。また、西大島というところで飲み会などをよくやっていたことがあるが、私は当時あまりお酒をのまなかったので殆ど印象にない。関東・中国・九州出身者はなじみの飲み屋があったのかその話題が多かった。私は、むしろ阪神尼崎駅西の大正商店街でよくパチンコをしていたことが印象深い。それと阪神尼崎駅北の病院に1ヶ月入院していたことがある。野球のけがで。わたしは遊撃手をされていて1塁ランナーの盗塁を防止するためキャッチャーからの(3塁よりにそれた)送球を受けダイビングタッチしようとしてランナーの右肩と激突した。そのまま昇天し救急車で病院に運ばれた。気が付いた時は病院のベッドの上であった。頭部を強打しているため入院期間は長くかかった。

次の伊丹市について、ここは結婚して新居を構えたのが南本町2丁目の井上文化住宅だ。駅でいうと阪急伊丹線の新伊丹駅である。塚口から稲野の次、3つめの駅であった。当時の勤務が大阪支社(淀屋橋)に行ったり、神戸本社(灘区)に行ったり、半々だったので、大阪に30分、神戸に30分で行ける、阪神間に住むことにしたのだ。アパートは駅から東に約1kmくらいのところ。その東に尼宝線(県道)があり、北に国道171号線があるものの、静かな住宅地であり、付近には高級住宅地もあった。アパートの住人はやはり新婚さんや小さな子ども持ちの若夫婦などであった。年代がおなじような人たちだ、中でも山本さん、佐藤さんという方々と少しであるがお付き合いをしていたようだ。伊丹といえばお隣の豊中市とならんで、大阪国際空港(通称、伊丹空港)のあるところで、頻繁に飛行機の音に悩まされる街としても有名である。私たちが住んでいた新伊丹の近くでは窓を閉めていれば、テレビも普通に見れるくらいでそんなに難儀した記憶はない。休みはやはり、大阪の梅田か南に行くことが神戸へ行くことより多かったようだ。甲子園や西宮球場も近くにあり、時々ナイター観戦にも行った。

社会人になってすぐに行った尼崎、新婚時代最も早く暮らした伊丹、双方とも印象的な街である。

加古川市も忘れられない街である。なぜか思い出すと自然に顔がくずれる、ほほえましい気分になる。それは5年間住んでいて、郷子・達洋とも幼少の頃で一番可愛らしい時期であったからだと思う。近所の公園、家周り、加古川の河川敷、たんぼ、加古川市内等々、小型自転車でよく家族で遊びに出かけた。住んでいたのは県立農業高校近くの横蔵寺団地というところで、300戸ほどで広くも狭くもない小規模団地だった。団地内はまだ全域私道であり、そのため舗装をしていなくて、砂ぼこりがたっていた。「団地」というのが出来たはしりで、まだ法的にも未整備だったのかもしれない。私らが入居したのも余地を分割して何軒かの小型住宅を建てたところだ。そこを購入したのが1972年8月だからまだ20代であった。勤務は神戸本社であったのでJR東加古川から灘駅まで通っていた。片道55分。

家は小さく、北向だったので陽あたりは悪く、特に冬は寒かったので「次に買うときは是非南向きの・・・」というのが合言葉・悲願であった。新入居の6軒の中で、井上さん、高橋さん、園藤さんという方とお付き合いをさせていただいた。子どもたちも同年齢でよく遊んでいたようだ。また、達洋が生まれた頃から喜巳子が近所に和裁を習いに行ったのが矢野さんところで、40メートルほどはなれたところである。達洋を昼寝させては習いに行っていたとか。郷子は近くの保育園に行っていた。今でも和裁をしているので34年になる。矢野さんのご主人には最初の軽自動車購入のときもお世話いただいた。自宅の道と小さな川を挟んで八百屋さんがあった。野菜、お菓子類などがあったのか買い物は便利だったと思う。その子どもさんとも遊んでいたようだ。5年間いて、その後郷子は野口幼稚園・野口北幼稚園にかよった。達洋はここでは入園まえなので自宅周辺で遊んでいた。よく怪我をする子で、ころんだり、石崖から落ちたりで、週に2回病院に担ぎ込んだこともあった。

加古川市は、わが神戸製鋼の主力工場である加古川製鉄所がある。関連産業を含めて中・小の企業も沢山あり当時は都市化の真っ最中で、ベッドタウンが開発されていたし、田んぼを用地転換し小住宅が集中建築されるわで人口が膨張の一途をたどる時期であった。工業団地が付近に開発中でもあし、加古川駅付近の再開発、東加古川の開発なども含め活気あふれる中都市であった。昔は明石までが神戸の通勤圏だったのが加古川市もれっきとした通勤圏となっていた。日岡山、加古川に代表される野山川に神社仏閣、古墳など歴史スポットなども多くあり、住みよい街である。

別府市立朝日小学校・朝日中学校は別府市の北西部に位置する。昔鶴見村、今は鉄輪を中心街とする地区にある小学校であり、中学校である。他校のように複数の小学校から集まってくるのではない。したがって、朝日小から朝日中学校と9年間同じ友達、子供たちである。みんな幼友達ということになる。

私の小学校時代はガキ大将・腕白であり、親分的な存在であった。遊びや・ケンカにたけていた。勉強のほうはトップクラスではないが、良いほうだったと思う。遊びのほうが勝っていた。チャンバラ、石けり、野球、パッチン、ビー玉、竹馬、鳥狩、魚とり、・・・なんでもござれである。そういえば海でカニをとるのが得意で学校の先生にほめられたし、先生も感心して見ていたことがある。それは海の堤防の石垣の下の穴に手を突っ込んで、中にいるカニを引っ張り出す技だ。一つの穴の中にはたくさんのカニがいる。多い時で同じ穴から20匹とったこともある。普通で4～5匹はとれる。ただカニがいる穴、手の入る穴を探すか否かが成否の分かれ目である。今でも左手指にカニから挟まれて出来た傷跡がかすかに残っている。畑や野原、山ではイモ、イチゴ、柿、イチジク、大根、きゅうり、レンコン、ぎしぎし、イタドリ、いぬびわ、ニッケ、ムク、エノミ、シイ、アケビ、グミ、ヤマイモ、クリ、サルノキンタマ、ツバナ(チガヤ)、ヤマモモ、・・・あげればきりがなし、何でも食べていた。川や海の獲物をいれるとまだまだいっぱいある。

小学校のとき、相撲が結構はやっていた。運動場に輪をかいて相撲をとった。私は朝潮ファンで、野球は巨人ファンだった。横綱東富士が引退直前、千代の山、吉葉山、鏡里、栃錦、大内山、松登、若乃花の時代であり、川上、青田、別所、藤村、小鶴、別当、土井垣、別所、荒巻の時代である。そのすぐあとに中西、豊田、稲尾がつづき、すこし遅れて長島、王とくる。そういえば、小学校の運動場で野球をした記憶はない。この時代、球技といえばドッジボールだったようだ。

それまで軟式テニスボールで広場野球していたくらいだったが、中学校に入ってやっと野球部に入れた。そのあとは、年から年中野球の練習にあけくれることになる。勉強といっても授業中のことはあまり覚えていない。英語の夜学(今の塾)で幸先生、三枝先生に教えてもらったことの方が印象的だ。そのほか中学時代の主な思い出は、修学旅行、庭園部活動、中体連、年末バザー、明礬大火事、移動教室、体育館兼講堂の新設、課外授業、などだ。

それと私にとって数少ない自慢できること、ひそかにしまっていることで、3年生のとき殆ど全員が高校の受験勉強にまい進したが、その時の成績が、120人中2番になったことだ。どうしても中原拓夫君には及なかった。あと不確かだが佐原さん折原さん、松木さん、後藤さん、橋本さん、内藤さんが良かったように思う。

人には長い人生、苦しいときの一つや二つくらいあって当然と・・・理屈では分かっている。今65歳、これまで総じて良かったこと、楽しかった思い出が多い。ありがたいことだと思う。でも振り返ってみれば苦しかった時期も何回かある。高校の受験勉強、富士山登山、中体連まへの野球の練習など・・・でも、これらの類とはことなるもの、それは・・・

最初に経験したのは、1978年～1980年新しく上司となった吉田課長が赴任してからの3年間だ。それまでシステム部門に新しくこられた上司に斎藤要さん、木村さん、中司馬さんらがいるが、この人たちの時にはこんなことはなかった。とにかく高圧的で、私のすることに全て否定するようで・・・まいった。私としても、反発はするし、無視もしたくなる。私以外の人にはやさしくする。ようは嫌われているのである。コンピュータシステムを担当するようになってからでも10年ばかりたっている。しかもいろいろ実績も残してきたという自負も私にはある。

いずれにしても私にとって初体験である。それをうまくこなせる術をしらない。もちろん自分にもへんなプライドがあり、未熟であったのだろう。井の中の蛙といったこともあろう。この上司がいる間は仕事に力が入らなかったし、頑張ろうともしなかった。この結果、人事評価には大きな罰点がついたことと思う。少しオーバだが、それまでかなり先を走っていたと思える出世レースが、これを機にむしろ遅れをとったようにさえ思う。

丁度この時期は、別の意味でも難しいときであった。三木に新築移転したものの、両親が老齢で三木に同居したり別府の病院を入・退院をくりかえしたり、施設に入ったり・・・の時期でもある。喜巳子も体調を崩し痩せていく。誰でも1, 2回は迎える両親の介護に遭遇する頃だ。こちらの方は、間もなくして元市議員の紹介もあり、運良く別府の特別養護老人ホームに入れたので、その後、お互い比較的恵まれた状態で暮らすことができた。

次に遭遇したのが、まさに21世紀を迎えてすぐのことだ。2001年4月に60歳を前にして会社生活からドロップアウトしたことだ。建設(ゼネコン)不況で海山鉱業でのリタイアを余儀なくされた。退職理由が会社都合ということから雇用保険を1年間近くもらえたものの、まだ現役世代である。仕事探しに神戸の人材センターやハローワークで就職活動をしたが、この年齢ではなかなか職はない。もちろん、収入面も現役レベルのものは期待できない、西神ハローワーク・三木シルバー人材センターでの臨時職員や、市の施設管理(公民館)などのアルバイトで推移した。そうしているうちに還暦を迎えることになり、それから5年が経過した。普通60歳までのところを、その前にフリーになるということとは何か「全うしていない」という気がしたのと、生活費・収入面でも申し訳ない気持ちがあった。

最近でこそ平穏な日々感謝と充実の時間を持てるようになってはいるが・・・。歌の文句ではないけれど、「少しばかりの運の悪さを恨んだりして、人は悲しいものですね・・・」(美空ひばり「愛燦々」)なのかもしれない。

別項で上司について、あるいは先輩や同僚、後輩などについて記述したが、今回は少し視点を変えて、これまでライバルと思った、あるいは振り返ってそう思える人達について。(敬称 略)

1. 小学校時代 渡辺吉五郎、毛利恒雄、永野善実、浅井勝利、
2. 中学校時代 渡辺吉五郎、首藤警、米田さん、安波まもさん、
中原拓夫、佐原征四郎、折原勲、本田信之、松木久美子
3. 高校時代 矢川突、矢田正道、荒金真臣、
4. 大学時代 石尾勇、杉森、芋谷、土屋
5. 会社 松井文広、山口真、松盛、杉森、吉田、米良

小学校時代に並んだ人はやはりそれぞれガキ大将の連中である。当然ケンカも強かった。まえ3人は各クラスで番長をはっていた面々だ。最後の浅井かっちゃんは一つ年下なのによくケンカした相手だ。私のほうが少し分が悪かった。中学校時代の上の段は、野球部の連中で打順を何番を打つかとか、守備のライバルだ。1つ上の米田さん、1つ下のまもさんは捕手をかけて争った間柄だ。下段は成績を競った人たちだ。最後まで中原君には勝てなかった。高校時代の矢川、矢田君は勉強も、なにをするにもライバルだった。ただし、矢田正道君には悔しいかな勉強やほかのことにもおよばなかった、差をつけられた。クラスメートが言っていた「頭のいい矢田」「頭の悪い矢田」で区別していた。おまけに「男前の矢田、そうでない矢田」とご丁寧にそんなことまで付け加えて、気安く呼んでくれた。彼は同じ神戸の三菱電機に就職し最近退職したが時々、奇遇な再会をすることが多い。例えば、東京の地下鉄東西線の中でお互い単身赴任の身で偶然再会し行徳駅前飲んだこともあるし、今年は JR 加古川線・小野駅の有名なそばやさんで、また去年は加西の古法華自然公園で紅葉がりで夫婦ともどもバツタリ、一緒に写真を撮ったこともある。荒金君とはマラソンのライバルだ。運動会の時、彼は建築科・私は機械科で、科選抜のマラソン選手であり、全校マラソンでも競った間柄だ。彼は中学駅伝の優勝メンバーの一人であったが、高校の時は私のほうが分が良かったと思う。

大学時代もやはり野球部の連中だ。石尾キャプテンに中軸打者の石尾、杉森、芋谷君。彼らほどの長打は打てなかったが打率で競うことはできた。芋ちゃんとは、首位打者争いをした中だ。土屋君は私より小柄だがなかなかのキャッチャで私を押しつけて正捕手になったファイトマンだった。

最後は会社でのライバルだ。同期入社の人だ。松井さんはいつも卓球と野球でお互い負けまいと競い・頑張った仲だ。松盛さん、山口さんは一時期同じ職場や同じ仕事をした間柄であった。お互い長い間意識してきた。会社では社員等級とか、役職というものがあり、私より先に上級職について悔しかった。杉森、米良さんは同期の中でもトップクラスの出世組だったように思う。吉田順ちゃんとは一番長い付き合いになるが種々の面でトントンといったところか。

コレクションそんな高尚な趣味は持ち合わせているわけではない。例えば、切手収集、人形・骨董品収集みたいに好尚かつお金のかかるようなものは私には向かない。本当にとるにたらない物を集めるクセがある・・・昔から。高校時代に、小型のカレンダーを、社会人になってからは旅行のスラップや各地の石を、そして、最近では、新聞のチラシにある地図を切り取ったり、三宮まで行って演歌CDを購入したり、ツタヤでレンタルしている。

1961-2年、大分工業高校卒業前の一時期、なぜか小型カレンダーが欲しくてたまらなかった。あっちこっちの本屋さんに行ってカレンダーを貰って来た。カラフルだったし、珍しいカレンダーが集まるのがうれしかった。集めたカレンダーが20年くらい前別府の実家でタンスの引き出しの中から見つかってそれを三木まで持ち帰り今でもどこかにしまいこんでいるはずだ。1961-2年のカレンダーが50種類ほどあると思う。

次に集めたのが各地の石だ。富士山、上高地、利尻・礼文、石鎚山系・・・などの。たしか1985年の中近東バーレーンのものもあったと思う。海岸や山、観光地などの場所で珍しい形をしたり、色鮮やかだったり、化石まがいだったりすると必ずといっていいほど持って帰って家の中に飾ったりして楽しんだ。飾らずそのまま仕舞い込んだものもある。いま考えてみると、時々石の記録帳みたいなものを作っていたらよかったと思う。重たいくらい沢山ある。

最後に演歌CDだ。THUTAYAではJ-POPのところにあるCDだ。美空ひばり、都はるみ、石原裕次郎、天童よしみ・・・50人を越える人数の歌手のものや青春歌謡1970年ベストとか年代別アルバム等沢山のCDを集めた。購入したものもあるが、多くはTHUTAYAでレンタルしてパソコンで録音し、自分なりのCDを再度作成する。演歌・歌謡曲が好きで、これがすごい量になっている。曲数でいうと1000曲はゆっくり超えている。唱歌・童謡や民謡なども入っている。こちらのほうは、アルバム毎に、歌手、題名、評価点(私の好み度)まで記録し、表紙・タイトルを付けている。携帯電話にも500曲ほど録音・搭載している。

最近、新聞やちらしに入っている広告で、店案内地図がよく載っている。三木はもとより、小野・加西・明石・神戸市北区、西区、加古川市・・・いろんなのが。とてもうまく表現しているし、きれいな彩り、わかりやすい地図があるとツイツイ取っておきたい気分になる。もちろん実益もある。2年間ほど集めたら結構な量になった。北播磨散策など、どこか出かけるとき役に立つ。もっと、ましなものをコレクションすれば良かった。例えば、お金とか。

体力と健康について、自信があるかといえばそうではない。自信がないということでもない。普通といってよい。それとはちょっと異なるが、運動神経は小さいころからよかったと思う。小学校時代はよくケンカをしたし、ガキ大将の部類だった事は別項でも何回か記している。走るほうも早いほうで徒競走はいつも上位を占めていた。選手にもなった。でも中学校になってからはそう早くなかった。体の大きさは小さい方だった。小学校時代は4、5月など先に生まれた分だけ大きいはずなのに……。以後、身長163cm、体重57kgがずっと続いている。

野球をやっていたので俊敏性や球技には自信があった。50歳を過ぎて20～30才代のダンプやミキサー車の運転手連中と野球の試合をする機会が時々あったが、そのときでも彼らと遜色のない動きや球捌きも出来た。投手や野手もやったし、打球だって若い彼らに引けをとらなかった。60歳を過ぎて著しく体力が衰えたと感じることもない。そんな中で只ひとつ、こんなはずではなかったと感じることがある。それは懸垂が一回も出来なくなっているということだ。何かの機会に公園の鉄棒で懸垂をしたが、驚いたことに自分の体を一回も持ち上げることが出来なかったのだ、ガッカリした。高校時代、長距離走(5～10km)は結構よい成績だったが、もちろんそれも昔の自慢話で、今は全くだめだ。

健康診断の結果、特段問題はないが、ただ、中性脂肪が高く、糖尿病の要注意が続いているのがとても気にかかるところだ。これも甘いものが好きで沢山食べるところから来ているのだろうか、節制した食生活を心がける必要を感じている。それと右ひざが突如としてひきつるといふか、痛みがくることがある。もっと老人になってこれが持病になって歩けなくなったり、遠くへ行くことが億劫になったりすると、これまた厄介なことになると心配している。20年ほど前だが、亀川のおじさんが膝が悪く難儀していたことを覚えているが、膝の悪いのは遺伝でもするのかと思ったりしている。年取ったらあっちこっち旅行や自然散策などを楽しみにしているのに、……。そんなことを危惧している。

健康や病気については、とくに喜日子のほうがよく研究しているし、趣味なのかと思うくらいそんなテレビ番組を好んで観ている。食べ物のことについてもいろいろ工夫をしている。私は気をつけないといふか、無頓着といふか、関心がない。それでいつもケンカになったり、注意される。

人間なんといっても、金はなくとも健康第一という。これからもずっと健康を祈って……。

趣味は時とともに変わることもある。昔、神鋼時代の自己申告の趣味欄に、野球・演劇・散策などと記入していた。余暇には趣味に費やす時間が多いことは当然のことである。今65歳、趣味といえば前々から続いている花畑をいじることである。拡張したり、改修したり、花を植えたり、草をとったりだ。四季折々にいろんな花が咲いて本当に綺麗だ。そして道を通る人々にやすらぎ、ほのかな気分になってもらえる。街もきれいになる。さいわい自宅の前と裏に空き地（緑地）があり、そこを公園・花壇みたいに手を加え、今では120個の花壇。広さでいえば、200～300坪に達していると思う。私が普段、余暇にすることは、花畑 WORK、音楽 CD 聞く、パソコンでネットサーフィン、ぶどう塾、読書、植物散策などがあるが、この花畑 Work に費やす時間が最も多い。ほとんど毎日午前か午後かあるいは一日中することもある。春先や秋は一日することが結構ある。でも夏はするとしても午前中だけである。四季折々の花に加え、実のなる樹もたくさんあり、これも楽しみだ。びわ・柿・しい・やまもも・さくらんぼ・あきぐみなどだ。池あり、休憩地、日陰、焼き場、堆肥場、階段、木登りの木、道具・資材置き場などもあり、小さな農場みたいでもある。

次は音楽 CD を聴くことだ。種類は演歌が主で童謡・唱歌・民謡などもある。美空ひばり、都はるみ、石原裕次郎はじめ歌手で50人は超えているし、曲数でいうと1000曲はゆっくり超えている。CD アルバムを購入したものもあるが、大部分は THUTAYA で借りてきたものをパソコンに取り込んで、再度 CD 化 (my CD) にしたものだ。マイクロ SD にこの演歌を入れ、携帯電話にセットしデジタル・オーディオとしても使っている。夜、必ず携帯電話を枕元に置きヘッドホンをつけ10～20曲は聴きながら寝る癖がついてしまった。CD だと15～20曲で入替え操作が必要だがデジタル・オーディオの場合はそれこそ500曲エンドレスに聴くことが出来る便利さがある。

孫が5人いる。孫と遊ぶのも楽しい時間である。今年から小学校に入学したので遊ぶ機会が少なくなったが、これまでは再々来てくれていたので頻りに遊んだ。砂遊び、木登り、山歩き、野球遊び、サッカーなど。鈴蘭台の孫、拓や美紅は今でも月1回程度は機会があるが、達洋とこは仙台になったので、洋翔・小桃・小夢らには遊べなくなったのが残念だ。

その他、月に一回神戸に行ったり、同じく月に一回中川さんと囲碁をやるのも楽しみである。対戦成績は少し分が悪いが徐々に接近しているように思うので頑張りたい。2目置きでしている。たまに同窓会（鉄鋼短大、小中学校、高校、神鋼 OB 会）などもある。

私が好きなものの一つに格闘技がある。実際みたことは1回もないがTV観戦は昔から好きだ。1960年代のプロレスリングヘビー級タイトルマッチ。カシアス・クレイ（後のモハメド・アリ）vs リー・リットンから始まる。その後、ジョージ・フォアマン、ヘンダー・ホフマン、マイク・タイソンの試合等は必ずTVで観た。フライ級などはあまり関心がないが世界タイトルマッチで日本選手が出る場合は好んで見る。現在日本の現役チャンピオンでWBCフライ級の内藤大助・バンタム級の長谷川穂積選手のタイトルマッチは面白い。ファイティング原田以後の日本の世界チャンピオンの試合はずっと観てきた。1970～1990年代の中量級のタイトルマッチも雑誌を購入して読むほど面白かった。マービン・ハグラ、シュガーレイナード、ロベルトデュラン、トーマス・ハーンズなどは最高に良かった。いまでもこれらに匹敵する選手は出てきているのだろうか？、各階級ともチャンピオンや世界タイトルマッチをやっているだろうに、ほとんど興味・関心がないのはどういうことか。団体が増え、重量階級も多くに細分されチャンピオンが多数になったことも関係しているのかも。

10年程前から日本で生まれたK-1、早くいえばキックボクシング。足でけても、回し蹴りでもOK。ほとんどの試合がKO勝負となる。毎年チャンピオンが変わるほどめまぐるしく強い選手が出てくる。アーネストホースト、ピーターアーツ、ジェムロレバンナ、マークハント、レイセフォーなどは常連でトップファイターだ。ここ3年間チャンピオンを保持しているセームシュルツは212cmの大型選手でとても強い。当分続きそうだ。中量級でも魔裟斗、アハメド・アブドゥル・アジズ、アンディ・ペグ、ブライアン・ストロムなどの4選手がからむ試合はとても面白い。誰が勝っても不思議ではない、きつ抗している。

これも10年くらいになるか、400戦無敗のヒクソングレイシーに日本の高田延彦が対戦したPRIDE NO-1からNO-34までの総合格闘技PRIDEは特に面白い。殴っても、蹴っても、首を絞めても、間接をとっても・・・なんでもありのルールだ。60億人中一番強いというキャッチフレーズのエメルヤ・エンコ・ヒョードル以下アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ、ミルコ・クロコップ、桜庭和志等々ものすごく強い格闘家がまだまだいる。このPRIDEがアメリカのUFCに統合されてしまった。UFCの試合はテレビで見ることが出来ないのが、次に新たに日本で生まれたDREAMや戦極でこれらの選手を見るのが期待出来る。日本の選手の中にも、吉田秀彦、小川真也、秋山成勲、五味隆典、青木真也、山本KID徳郁選手などの試合は見逃せない。今後も続くと思うがどんなカードになるか楽しみだ。

有名なプロレス選手がUFCや戦極、DREAMに参戦することも考えられる。プロレスはほとんど知らないが、ジョシュ・バーネット、カート・アンゲル、ブロック・レスナーなどは超ど級みたいだ。

独楽まわしが趣味ということではないし、特技ということでもない。小さいころに独楽まわしをおぼえて今に至っている。でも私がする独楽回しを誰でも出来るということでもない。多分普通の人には出来ないと思う。独楽の達人であればとも簡単だし、インターネットで調べてみるとどうしてどうして、それは素晴らしい技を持っている人が多い。映像を交えて曲芸みたいなその技が見る事が出来る。そんな達人に比べたら私は足もとにも及ばない。月とスッポンほどの違いがある。私ができるのは、鉄輪コマにひも（別府では「よりそ」と言った）を掛けて空中でコマをまわす。それと一連の動作で、私の体も回るし、コマが私を中心に公転する。おまけに廻しているそのひもから一時的に手を離す。そしてコマは空中に放り出されてまわりながら、再度そのひもに引っ掛けられるという廻し方ができるのだ。応用としてやかんの蓋や、茶瓶のふたをコマかわりにまわすこともできる。このほか、紐を巻いたコマを真下に落とした後、再度ひもでコマをすくいあげるとか、同じく真下でなく真横にほおり投げて手にのせるか、またはヒモでそれを受けるなどである。なぜそんなことができるのかと言えば、小学校低学年のときだった。普通のコマ回しや、空中コマ回しを近所のお兄さんがやっているのを見て、自分もやろうと一生懸命練習に練習を重ね、やっとできるようになったのだ。その練習に掛けた時間は中途半端ではなかった。極端に言うところ朝から晩まで、それも毎日毎日、繰り返してトライしたようだ。とにかく他の人ができて、私にできないわけではないと思い。また、同級生の中で一番早くできるようになりたい。そんな思いで繰り返し繰り返し練習した。いたるところで練習をしたが、一番多かったのはお寺の境内だった。

最近、三木市志染町公民館で、小学校の子供と、老人会の交流遊び会でコマを廻すことがある。お年寄りと子供と一緒に遊ぶ行事で、歌や踊り、大正琴、ゲームなどをする。老人会の会長さんから、子供の前で独楽を回して欲しい、まわし方を教えて欲しいと依頼された。ひととおり独楽の回すのを実演した後、子供たちにそれぞれ1個ずつ独楽を与え実際コマ回しにトライする。子供たちは回せるよう懸命に頑張る。生き生きしているし。3年ほど前からやっており恒例化している。

20年ほど前になるが、琵琶湖畔のホテルでIBMとの合同研修会・検討会での休憩時間でコマ回しのわざを皆の前で披露させられたことがある。そんな話が出てそれでは、是非やってくれということで。20人ほどのメンバーだったが、私ともう一人、熊本出身の人が出来るくらいで後の人はギャラリーであった。少年野球の指導者のときも、子供たちに披露したことがある。この時子供たちには難しいと思ったのかあまり関心を示さなかった。大道芸みたいな曲芸でもないし、お金がとれるほどの芸でもない。

三木市シルバー人材センターと係わり合いが出来たのは2003年7月だった。その4月にハローワーク西神の仕事が一年で終わり、そのあとブラブラしていた時だった。神鉄ハイキング等を主に遊んでいるころ、次に何か軽作業での働くところでも・・・と考えていた。60歳をすこし過ぎていた。

シルバー人材センターの説明会に参加して最初、関西国際大学のIT関係の紹介があった。やはり最新の高度のIT技術を必要とするのだろう、不採用であった。だいたいそんな技術をシルバーに依存しようとするほうもおかしいのだが。次に紹介いただいたのがなんと、シルバー人材センターの仕事そのものだった。業務开拓員の補充だった。前任者が任期6ヶ月のところ、2ヶ月で投げ出したので、その後釜が私に回ってきたのだ。ラッキーといえばラッキーだ。もう一人の担当者、山根さんと三木市の企業、法人、役所関係、場合によっては一般家庭にも訪問してシルバー向きのしごとを頂戴することが任務である。もちろんすぐに具体的な成果があればそれに越したことはないが、あとあとの為に三木市シルバー人材センターをアピールしておくのも大きな狙いがあったのだ。

仕事はとても楽しかった。山根さんと一緒に回ったり、分担してまわったりした。そして時間を決めて二人で集まり、作戦をたてたり、反省したり、休憩雑談したり、最終報告書の打ち合わせをしたりした。三木サービスエリア、三木山森林公園、喫茶店、双方の自宅なども。その仕事は2004年1月に終了した。次は、これまたラッキーなことに三木市の施設管理、志染町公民館の管理人に紹介がありそれをするようになった。いろいろある仕事の中でも施設管理の仕事は人気があり、希望者が殺到しなかなかなれないのが普通である。それがすぐにまわってきて良かった。あれから5年になるが今でもその公民館で管理人の仕事をしている。普通の日は17:00~22:00、日曜日は8:30~17:00 職員さん不在時間帯での、各サークルの部屋利用申し込みの受付、図書・備品の貸し出し、空調のセット、戸締り・・・などで自分一人だけの日直業務だ。時間がありあまるくらいあるので読書、パソコンワークなど自分のことも出来る。例えば、この自分史などの文章作成などだ。シルバー会員3人のローテーションでまわしているので3日に1回当直になる。主に夕方から夜の勤務であり、昼間は自分のことができるのも好都合だ。

またこれとは別にいくつかの仕事を平行してしたこともある。それは東播用水の警備・監視人。これも職員さんがいない時に用水路や計器類の異常監視するもので、日直と宿直がある。しごとはどこかに異常がなければ殆ど何もすることがなく読書やTVで過ごすことになる。老人向きのしごとである。また別の仕事として三木霊園の場内清掃と事務もしたことがある。通常時は墓参りの供花の後片付けが主でその外、夏は草刈、秋・冬は落ち葉の片付けなどに忙しい。刈払い機の使い方を覚えたり、トリマー、発電機を使ったり、最初のときはチェーンソーで松の大木を切る仕事もあり、いろいろ今までしたことのないことを経験した。

この年齢（65歳）になると同窓会、OB会なるものが結構頻りに催される。もちろん、自分が世話役をすることもある。どうしてこんなにあるのか、それはやはり時間がたっぷりあることと、昔を懐かしむ思いがつよくなることもあるのだろう。最初に取り上げなければならないのが、やはりカンチロ会だろう。別項に「カンチロ会」として特別記しているが、これは私が最も大事の思っている同窓会である。1965年入学、1967年卒業の鉄鋼短大 機械工学科 A組の連中の集まりである。卒業時から私が主幹事で今まで40年間で8回実施した。途中から日本各地でしようという事で神戸、名古屋、広島、北九州、北海道、熱海などで各地の幹事さんの世話で開催されている。最近では尼崎（短大のある）有馬、神戸をセットで2007年12月に23名集まってした。

小中学校の同窓会は、別府市鉄輪に同級生がたくさんいて、本当によく世話をしてくれる永久幹事さん、会長さんがいて、誰かが帰省した時にある小さな同窓会や、関西や長崎、四国などの同窓会旅行、そして還暦・65歳などの節目の記念大同窓会など頻りにかつ盛大に開催される。その度に記念の写真を送ってくれる。本当に頭が下がる思いだ。今年も5月に（65歳の）同窓会が別府市のホテルであり、案内が来ていたが直前に甥の結婚式で帰省したとこであり欠席した。本当は還暦の次は古希を記念の予定だったが10年も待てなくて開催したようだ。写真を送ってきてくれた。次はなんでも来年くらい名古屋であるとか・・・。そういえば関西であったときは私も一役かった（神戸案内）

高校の同窓会はあまりない。1962年に卒業して次の正月に一回開催されていて、そのあとは全々開催されていなかった。2003年に卒業40年&皆が還暦ということで有志が世話役で開催された。大分市のホテルで昼間にあった。私にしては初めての同窓会である。90人中27人が集まった。懐かしい面々だ。恩師も来ていた。わたしは喜び勇んで大分までフェリーで往復2泊する日程で帰省した。とても良かった。この時私は、なつかしい機械科の応援歌を先頭に立って歌った。会を盛り上げるために、大工魂ここにあり、九州男児ここにありの思いで・・・

会社のOB会は、いくつあるのだろうか？ なんとといっても、長年在籍したシステム管理部のOB会だ。この部署は大所帯なのだし、歴史も長いので一同に会することはない。それぞれ、在籍した年代がちがうし、それと全体をまとめ、求心力のあるえらいさんが見当たらないこともあって、いくつかのグループに分かれて、あるいは年代ごとにわかれて開催される。今年も3回あった。1990年代組、1970年代組（本社s組）、1970年代組（人事・労働s組）などである。それと、別項で記した一杯会、これも会社のOB会みたいなものだ。5人ほどのつながりで。

パソコンをやっているいきなり動かなくなることがある。マウスをどこに動かしても、キーボードを押しても全く効果がない。どうしたらよいのかわからなくなる。この状態をフリーズ（凍る）とか固まるとか言う。日常生活の中でこんなことがあるだろうか？、言い方を変えれば頭の中が真っ白な状態になったのと類似している。

中学2年のときこんなことがあった。3年生の卒業式でのこと。場所は、今でも覚えている。当時はまだ体育館兼講堂が建っていなかったので図書室の隣の連結教室でのことだ。卒業生を送る言葉を私が担当することになった。事前にわかっていたわけでもない。その日卒業式の30分くらい前に指名された。たぶん成績上位の人にその役割が決まっていた、なにかの理由でその人が出席できなくなり、私にその役が回ってきたのだろう。一応送る言葉を何回も練習したのにいざ本番となった時、卒業生・緒先生そして同級生等大勢を前にして言葉が全く出てこない。文字通り固（かた）まってしまった。一瞬の出来事でなく、しばらく沈黙の時間が続く、それを回避する手立ても知らない。みんながこまっているとき、担任の先生がやっと助け舟をだしてくれて、なんとか後の言葉が言えた本当に恥ずかしい経験をした。

次は、やはり中学1年生の時、別府球場での新人戦でのこと。補欠ではあったが1年生なのに抜擢されて新人戦の登録メンバーとなった。試合も負けていて、後は補欠でも出して経験をつまそうとの監督の配慮で私は2塁手で起用された。私は、上がってしまった。何をしたら良いのやらからず右往左往しているばかりだ。ランナーが2塁にいる場でけん制球の対応と打球の守備双方をする必要があるのに。ピッチャーが投げる牽制球にもタイミングが合わず、見ている観客もこの様子はおかしかったことだと思う。無理からぬと言えはいえる。それまでキャッチャーの練習ばかりで2塁手なんて全く経験したことがない。おまけにこの時、私のユニフォームは先輩のおさがりで自分の体には大きすぎるものだった。格好自体も笑い話だ。当時は物に不自由していた時代、今ではこんなことはない裕福な時代である。

今の中学の野球選手であればこんなことはない。少年野球などで百戦錬磨だから。

こうしてみるといずれも中学校1、2年生のときで、それ以後こんなことはなかったのか？・・・思い出してもその心当たりはない。2つのケースに共通するのは、自分に責任が伴っていること、そして初体験もしくは経験不足であること、重大局面であることなどが固（かた）まる時の条件なのか。中学以後このような局面に遭遇していないのだろうか？

これまで40年近く会社で仕事をしてきた中で、数は少ないが、自分でもすごいと思うし、充実していたし、難しいことに挑戦していて、その成果も十分あったようなそんな時期がある。「輝いていた時」と言えるだろう。

1975年人事・労働システムを担当していたとき、鉄鋼五社で企業年金導入の検討が始まった。大手鉄鋼会社の労働担当者の集まりに私も労働部の主任と一緒にシステム担当の立場で参加することになった。大手町鉄連本部、新日鉄新山谷寮、住友クラブ、日本鋼管熱海保養所などを利用して10回ほど会合があった。このプロジェクトは鉄鋼連盟、鉄鋼労連の懸案事項であったので注目の的であった。各種年金、他の国の年金、保険など、いろいろ勉強して数値分析し確認することになった。難解な年金数理に基づく30～50年間のシミュレーション・モデルを作成し自社の労務構成をあてはめ、各社ごとにシミュレーションし、再度、結果を持ち寄るということになった。ここで各社ともシステム担当者の出番だ。私は神戸製鋼の社員データにて、このシミュレーションを実施し結果を当プロジェクトに報告した。この時出来たのは新日鉄と神鋼のみで、NKK、川鉄、住金はこのモデルをコンピュータ・システムに具現化することが出来なかった。私もこれを実現するのにどうしたら可能か・・・？、何日も方策を考えた結果、「当時のISファイル使用とサマリーデータにより、さらにリード&ライト方式」という独自の方式(矢田方式といっても良い?)によりなんとかこれを実現した。達成感、満足感をいただいたものだ。もちろん、データ処理・計算処理のアルゴリズムはこのプロジェクトでは当然のこととして問題にはならなかった。どちらかといえば裏方の話である。

それから10年後、エンジニアリング事業部で担当した、中近東・バーレーン国でのアルミ圧延工場建設プロジェクトでのことである。わたしも当プロジェクトの一員で、1年間、建設工事管理システムの担当として現地に只一人で派遣された。当事業部に配転して半年後のことである。建設スケジュールをPERT (Project Evaluation Review Technique) 手法により、オフコンのソフトウェアARTEMISにて1年間実施した。土木・建築・機械据付・試運転・引渡しまでの建設工事の進捗スケジュールとその実績をこのコンピュータ・システムからアウトプットして報告した。客先はGARMCO (Gulf Aluminum Rolling Mill Company) で湾岸5ヶ国(カタール、クウェート、イラク、イラン、オマーン)共同出資であった。初めての海外単身赴任で酷暑の中、アラブの国で無事この任務を完遂した。

取り上げるのが最後になったが、1971年から1980年まで10年間担当した本社システム(人事・労働)でのシステム運用。これは、開発初期の段階であり、システム拡張や安定稼働の重要な段階であったが着実にその任務を遂行したし、鉄鋼各社にさきがけて特許管理システムや健康管理システムを開発したことも自賛に値すると感じている。

三木市に住んで30年5ヶ月になる。加古川の家が狭くなったのでほかを探すようになった。大久保東団地の申し込みをしたが外れた。そのとき大和ハウスのセールスマンから紹介されたのが三木市緑が丘町であった。最初は殆どその気はなかったが、区画サイズ、南向き、角地、・・・等々の状況からここに決めた。1977年7月だったように思う。翌年3月19日、まだ寒い日に緑が丘に引っ越した。長女・郷子の小学校入学にもタイミングをあわせた。前の加古川のときに比べ3～5℃寒いように感じた。神鋼本社までの通勤時間は加古川の時よりも距離的には近いにもかかわらず、多くかかるようになった。それでも陽があたるし、暖かだし、新築だし、気持ちが良かった。35歳のときである。達洋も緑が丘幼稚園に入園した。

あれから30年になる。月並みだが空気はきれいだし、緑は多いし、静かだし、快適な生活ができる。途中1980-82の間、両親と一時期同居することがあったし、1990-96年は郷子・達洋が大学に入り、大阪&東京に下宿し、子供は不在のことが多かった。1996年以後は就職・結婚などで2人は離れてしまった。私も、1984～85年は中近東へ、1994～95年は東京へ、1996～98年は岡本（東灘）で、いずれも単身赴任で三木にはいなかった。1998年以後は夫婦2人になった。それからちょうど10年である。

転居当時はまわり（隣保）に多かった小学生、どこの家庭でも小学生がいた。学校の運動会、町民運動会、自治会ハイキング、お祭り、スポーツイベント等々親と子供の集うにぎやかで、活気ある街であった。それが今ではどこの家庭でも、皆、他の街へ就職したり、嫁いだりして子供たちは見当たらない。たまにあちこち孫たちの姿を見かけるが・・・老人の街になってしまった。三木市でも緑が丘地区の高齢化や空家の増加などの問題が拡大している。重点課題にも取り上げられている。地価の低落率が県下1、2も続いているとのこと。

グリーンピア三木、三木総合公園、ホースランドパーク、三木山森林公園、防災公園など大型の都市公園があり、散策、運動にもってこいのところが沢山ある。もう神戸、大阪に通うでもなし、出張があるわけでもない。いずれも住めば都だ。本当に三木に来て良かったと思う。これからもせいぜい三木市にお世話になり、楽しみたいと思っている。

今では「最愛の街、三木市」であり、「かけがえのない私達の街」である。

今日は太平洋戦争が終わって63年目の終戦記念日だ。あちこちで記念哀悼行事が行われている。高校野球甲子園大会も12時から試合を中断して黙禱が行われる。何百万人の人がなくなり、東アジアの人々に甚大な犠牲をもたらした第2次世界大戦が終わったのが昭和20年8月15日。直前には広島、長崎に原爆を投下されたし、日本が始めて敗戦を経験し、苦難の日々が始まった。経済復興を経て63年。今や繁栄を通り越して新たな次の難儀に直面しつつある。

私はこの終戦の2年前に生まれている。と言っても戦争の記憶は全くない。その後、覚えているとすれば防空頭巾、防空壕、傷痍軍人を見るくらいである。鉄輪の旅館「大平屋」に戦争帰りの軍人が療養に泊まっていたのを覚えている。白い衣服に、白い松葉杖、多くの傷痍軍人がいた。それも長い期間滞在していたようだ、同じ人か否かはわからないが。1950年から始まった朝鮮戦争の軍人かとも思ったが、日本は参戦していなかったことから、やはり太平洋戦争の時の軍人さんだろう。旅館「大平屋」で思い出したが、ここは元衆議院議員、故佐藤文生さんの実家であり、私の生家はその隣だった。母はよく知っていて「ぶんちゃん」と呼んでいた。母の葬儀に文生さんからの弔電の中も含まれていた。

終戦後の記憶の一つに、進駐軍がある。よく街中で見かけた。女のひとを連れて闊歩していた。その女の人を「パンパンガール」と呼んでいた。ジープに乗って走っていたこともしばしばだ。進駐軍は何をしていたのか知らないが、時々チョコレートやチューインガムをもらうため、私たちは子供ながら、英語で「ハロー、チューインガム」なんて言っていてジープを追いかけていた。ある時は、電話工事の途中なのか、大量の電気コードを持っていて、ガムの代わりに銅製の電線をもたらしたことがある。そのころ貧しい私（子供）たちは、よく金属を拾い集めて古鉄屋に売りに行って小遣いにしていた。この電線もそれに使ったのだろう。値段が高い順に、鉛・銅・真鍮・鉄・トタン・ブリキの順だったと思う。もちろん、金、銀、プラチナなどのレアメタルなどあるはずがない。1か月ほど集め、大量に持ち込んでも貰えるのはせいぜい10～30円くらいだった。佐賀の「かばいばあちゃん」が腰ヒモに磁石をぶら下げて道路を引きずるのもこのクズ鉄集めなのである。

それと、朝鮮戦争の時の記憶はハッキリ覚えている。戦闘機と戦車だ。四角い形をして、轟音をたてながら上空をロッキードが飛んでいた。迷彩を施した戦車が河や野原をゆっくり動いていた。別府には、自衛隊の駐屯地や十文字原に演習場などがあり、演習・訓練をしていたのだろう。戦況について近所の3つ上の兄貴が説明してくれた。

当時は、食糧難と貧困の時代である。親も子育ては大変だったろう。終戦後のことを考えると両親のことを思い出し、感謝の気持ちが込み上げてきた。

北神生コンクリート協同組合に出向したのは2000年2月1日寒い日、雪が積もっていた。1994年2月1日に東京に赴任したときも、やはり雪が積もりあちこちに残っていた。「2月1日」と「雪」に共通点を感じた。北神協は兵庫県三田市川除というところにある。JR三田駅または、神戸電鉄三田駅から歩いて15分、バスだったら5分くらいのとこだ。駅からはいつも歩いて行っていた。国道176号線を歩くか、三菱電機三田工場の西側に並行している農道を歩く。どちらかといえば車で通勤することが多かった。その場合は三木から吉川（よかわ）関西クラシックゴルフ場横を通り、有馬高原病院・三田池尻、川除（かわよけ）のルートであった。

生コン協組は生コン製造会社11社から各社1名づつ幹事が派遣されて生コンの出荷を担当する。正確には受注案件は同じく北神生コン卸協が担当することになっている。卸協も同じところに事務所を設けている。受注後の各工事現場から生コンの要求は、事前に、日時・数量・品種などをこの協同組合で受付し、それを各会社の工場に連絡する。あとは現場と工場で詳細の連絡をして生コンミキサー車で納入する。大きな建設現場では総量が10万 m^3 に達し、2年がかりで収めるといふところもある。1日の出荷量は1現場30 m^3 から150 m^3 とバラバラだ。生コンを運搬する車をミキサー車という。過積載は許されないので1回当たり7.0トン（4.5 m^3 に相当する）が限度だ。ほとんどの現場が4.5の倍数の量を打設する。一つの現場では原則、複数の生コン会社が分割納入する。これを「割り決」という。「割り決」表には150現場ほど、各社ごとに納入数量が記入されている。納入するごとに数量の消しこみがされる。工事現場により、すなわち高速道路、橋梁、マンション、大型店舗、都市公園、一戸建て住宅基礎、・・・などの違いにより、やはり強度や品質が異なる。また、ダム建設などの場合は大量の生コンを使う場合は、工場出荷・運搬という形式をとらなくて現地に生コン・プラントそのものを設置する形をとるらしい。

北神協の縄張り範囲は、三田市、神戸市北区、旧吉川町、旧東条町の全域と東は宝塚市の北部、西は三木市の東部である。この範囲内の生コン工場は全工場この組合に加入している。が困ったことに、この範囲外の生コン工場から、単価を低くしてこの区域内に生コンを運び込む業者（アウト業者という）があり、難儀した。

私が北神協に勤めた2000年当時は現在に比べればまだ工事案件は沢山あったようだ。一工場の月間出荷量は3000 m^3 ほどあった。我が海山が「割り決」に入っていた現場は20～30箇所ほどあったが、その中でも印象的なのは阪神高速7号北神戸線の有馬北工区（間・前田JV）と西宮（金仙寺湖）山口トンネル（銭高・新井JV）および

三田 SATY (大林・日産建設 JV) は1日の出荷量が100㎡を越えるし、それが間を開けなくて何回も納入した「おいしい」現場であった。1年近く続いた。鹿の子台の中学校の工事もかなり頻繁に出荷し結構な量に達した。

今では公共工事が大幅に減っており量的にみて当時の半分の1500㎡(/工場・月) 位らしい。震災後の復興ピーク時の2～3年間は各社とも1工場・1月あたりの出荷量が10,000㎡を越えていた。

11人のメンバーは私を除いて皆生コンのプロでこの世界の猛者連中である。工場長もいれば、役員もいる。ミキサー車の運転手もいる。生コン一筋に20年から30年飯を食っている人たちだ。その中にまじって、自社が不利にならないよう「割り決」や、毎日の出荷を担当する。それはその日の納入数量や生コンの打設方法により、おいしい/おいしくないがあるからだ。表現を悪く言えば「狐と狸の騙しあい」のようなところが随所にある。協組の仕事にはそんなところが多いのである。

そんな騙しあいの場合、言い換えると戦場に海山からど素人の私が幹事として派遣された。他のメンバーにとってみれば歓迎するところである。好都合である。何故なら自工場に有利な仕事を持っていけるから。私も最初はいろいろ教えてもらったり、じっと様子を見ていて変なことをされていないか、ちゃんとした仕事をもらえているか、を素人なりに見守っていた。結構神経を使っていたしやきもきもした。

それでも仕事は楽しかった。未知の世界であり有意義であり、充実もしていた。11人の猛者たちのボスが幹事長である。かなり年輩で遊び人だ。そして面白い。機転の利く人で事務所でも大笑いする時が多い。それは幹事長のなせる技である。競馬をやるし、パチンコはするし、宝くじからナンバーズ、賭け事ならなんでもこいだ。どこか知合いで馬券を買うところがあるのだろう、仕事中にしきりに電話をし単勝、複勝いろいろ連絡していた。赴任してまもなくであった「矢田さんの車よりいいのがあつこに(中古車廃棄場)に積んどったよ」皆で大笑いしたことがある。副幹事長は丹波の人、ヤクザみたいな丸坊主の大男、190cmくらいか、めっちゃエッチの人で、話といえばそっちのえげつない話ばかり。これにはまいった。マツタケ、栗、黒豆の山・畑を持っている。仕事中に一度そこに遊びにいった。丹波の黒豆収穫中で、2枝ほどもらって帰ったことがある。

もう一人の副幹事長はたばこをすわない。珍しい人だ。10人が狭い部屋で絶え間なく吸っているのに彼だけすわない。辛抱できるのか不思議だし、文句もいわない。退散するわけでもない。でも物知り博士みたいな人だ。前職はタクシーの運転手、経理事務、建材店の営業・・・など経験豊富だ。そのためか、神戸市から西宮、尼崎、三

田、とにかくよく地理、道路にくわしい。物事なんでも知っている。

また、一番まじめなやさしいNさん、当時盛んだった福知山のフィリピンパブに毎日毎日通い続けるほど熱の入れようだ。道路が凍った国道176号線を福知山まで往復するはで。フィリピン女性の休暇のときにマニラまで同行する徹底ぶりであった。そのころは他のメンバーも入れ替わり、たちかわりこの福知山めがけて通っていた。三木からでは帰れないので断り続けていた私も全員で行くことになった時、断りきれずに、1回だけ行った。その時は飲んで、演歌やダンス、一番騒いだのではないかと思う。その時も往復はメンバー所有の11人乗りキャンピングカーで行った。飲酒運転だった（当時はよく飲酒運転をしていた）。三田―福知山は三田―姫路よりも遠いのに。

一番年を食っているように見える、怖そうなおっさん東条の方から来きていた。小野市と、黒田庄と双方に奥さんがいるとか不思議な人だ。いつもは東条の家で息子と2人で住んおり、週末は小野か、黒田庄に行くみだ。三田の最北部にある生コン会社の幹事さんは仕事の合間に、保険の外交、集金にまわる。私も何回かつきあったことがある。犬にほえられたこともしばしばある。彼がパソコンを習いたいと武庫が丘のマンションに行ってそこで教えたこともある。また私が倍率の良い双眼鏡を購入した時、古いのをくれというので進呈した。夜マンションのベランダでたばこを吸いながら、双眼鏡を使うという。何をするといいのか。彼は1番の酒豪でもあった。

現場パトロールも毎日の仕事の中。現場の進捗はどうか？ 不都合はないか？ アウト業者が横行していないか？ などの情報収集のために。北は丹波市、母子（もうし）の永沢寺、東の武田尾温泉、西の東条IC、三木などいたる所に出かけた。このお陰で三田、北区、東条、西宮、吉川、三木の地図、道路を覚えた。

あれから7～8年になる、いい思い出になってしまった。「飲む・打つ・買う」の代表選手、Kさんは博打で身上をつぶし今は亡くなったという。フィリピン通いのNさんはこれまた女で身上をつぶし、離婚してしまったとのこと。酒豪のSさんは自社の社長殺人事件後、後任の社長になっているとのこと（犯人は別人）。一人だけ、まだ時々一緒に連絡をとっている人がいる。それと、当時11社12工場であったのが今では8社8工場になっている。特に公共工事、ゼネコンの業績に左右され、浮き沈みの激しい業界である。合併など繰り返したり、淘汰される工場も結構ある。

1971年1月から1980年までの10年間、人事・労働システムを担当した。シミュレーションソフト GPSS の全社普及を担当していた後だった。それも27歳でいきなり9人の中のグループ・リーダーという立場で最初は戸惑いがあった。後半の5年は経理関係のシステムやオペレーションやパンチ業務を含む運営担当も関係することになった。人事システムの先輩であり、大分工業高校の後輩である広島さんと1970年の年末一緒に帰省した。関西汽船の船の中で当システムの概要や関連事項について、いろいろ聞いたことを思い出す。何分にも新規の体験でリーダーということで大いぶ驚いたところがあった。

当時、神鋼では企画職が12,000名、作業職が24,000名の合計36,000人の従業員であったと思う。当時事業拡大、従業員数の増加の時代だ。労働部に雇用開発室なる部署まであった。この企画職を対象とする人事システムと作業職を対象とする労働システムおよび、双方共通に福利厚生システムがあった。給与計算・賞与計算・年末調整・社会保険等級算定・人事評価・自己申告・昇格・昇進などのサブ・システムから構成していた。前任の小林護郎さんが初期のコンピュータ導入当初から立ち上げたシステムで当時は新聞にも掲載された。人事部門の制度・システムをコンピュータ化するというので。私はそれを軌道に乗せる役割であった。

やはり印象的なことは、毎月の給与計算である。昼過ぎに最初のJOBを起動させ、夕刻に厚生データをマッチングさせ、18時くらいに本計算に達するくらいのコンピュータスケジュールだったと思う。夕食後、20時くらいに計算は終了し、次は給与明細をはじめとする作表フェーズに移る。給与明細のプリントは約3時間を要する。したがってこれだけで23時くらいに終了することになる。作表20~25表全部をアウトプットするには翌朝の4時くらいだ。これは順調にいったケースでありそんなことはまれである。他システムの順延、途中の機械トラブル、プログラムミスなどさまざまな原因で、遅れることや、リランといってやり直しをすることも結構ある。そうすると当然徹夜だけではすまなくなる。コンピュータ室には給与担当者以外は当然立ち入り禁止である。夏と冬にある賞与計算も月例給与とは別に、これと同じような計算プロセスで処理する。また、必然的に年末調整、社会保険標準報酬の算定、地方税（県・市民税）更新などの業務も関連サブ・システムとして存在した。

人事関係の中心とも言える評価関係では、人事考課、昇進・昇格などのシステムがあったが、これらの業務は特に慎重を期すし、神経を使う仕事であった。給与関係でもそうだがシステムテストにテストデータの選別・抽出に関係者・知人が含まれたり、上司や会社トップが含まれることも度々だ。正確に処理されているか否かその結果を

我々担当者自身での確認をしなければならない。これらのことが全部わかることになる。最初担当する時に小林課長から言われた。「奥様を含めて他人には絶対話してはだめです」と。担当している期間一番神経を使った。

その中に他社にくらべユニークかつ先進的なものといえる多面的に観察するシステムがあった。普通、人事評価は上司が部下をみるというのが一般的であるが、上司の評価に加え、部下が上司を、あるいは同僚が、同僚をといったように多面的に評価する「適正観察システム」が開発初期であり、印象的でもある。これは慶応大学の教授とタイアップして日本で初の評価システムであり、人事部と当部の大卒女性社員が開発した。

コンピュータ（データ）処理の側面からみると、人事管理マスターといって従業員の社員属性や評価記録を含んだマスターデータがあり、これに例えば住所、家族状況、人事考課などの変更記録（トランザクション）を入力してマスターデータを更新するという大まかな仕組みだ。給与関係でいえばその月の残業時間、交通費の変更などがトランザクションに該当する。人事・労働・厚生システムとも、このマスターデータを MANNO をキーにしてマルチ・レコード、バリアブル・レングスの15インチ MT（マグネティック）に収録し、COBOL 言語でバッチ処理するシステムであった。人事・労働・厚生システム全部あわせて1200本くらいのプログラムがあったと記憶している。

先に記したように、小林さんが人事システムを、広島さんが労働システムを開発し、私と青木さん、長谷川さんで厚生システムを大幅機能拡張した。こちらのほうは、住宅融資、住宅預金、各種保険、寮、社宅、持ち株制度、通勤交通費補助などの福利厚生制度を運用するシステムである。この分野でさらに財産形成制度を青木さん、高木さんが、健康管理システムを矢田と竹林、白浜さんが、少し部門が異なるが、特許関係システムを矢田、青木、梶本、高木さんが開発もしくは機能拡張した。これも人事・労働グループの仕事であった。

関係者の名前を列挙しておく（敬称 略）

小林護郎、田中勝、矢田隆是、広島範明、青木正弘、板屋、村上亮、長谷川豊、成田経利、高木博史

鈴木顕彦、竹林洋一、梶本千秋、志賀久司、白浜義文、竹中文男

岡崎明美、長田、能勢、牛草、大川、藤、藤田、森、大前（この段は女性）

私が担当から離れて青木さんがリーダーを引き継いだし、長年の懸案事項であった漢字化やオンライン化は竹林さんが成し遂げたようだ。私が担当して39年、離れて29年当時の面影は全くなくなっていることだろう。

今担当している人も、やはり同じような作業や苦勞をしていることと思う。長いこと関係していただけに關心・愛着みたいなものがある。

65歳を迎え元気でいられる、大変ありがたいことだと思っている。もちろんまだ先にも私の人生はある。これまでいろいろの角度で、自分との関わりあい・想いについて記述してみた。総じてなつかしい、良かったことの多い、ほほえましい出来事が多かった。過ぎ去ったことだから余計にそう思うのかもしれない。これからも、今までと同じように、いろいろな面で、よいめぐり合わせができれば・・・と願っている。

昭和18年ちょうど第2次世界大戦（太平洋戦争）の真っ最中に生を受け、食料不足、貧しい中で、元気に小・中学校時代を経て、ゴールデン・シックスティ（泰平宮治大分工業高校校長、言）は高校時代であった。その後から急速に経済成長をなしとげ、物が豊富になった。（豊富になったからハッピーだといわないが）、神鋼のシステム部門の皆さん、鉄鋼短大の機械科の同僚と切磋琢磨し、親しくおつきあいをさせていただき、いろいろの仕事を通じて、また鉄鋼短大、中近東（パレツ）、東京時代、海山時代など貴重な体験をし、私なりに十分達成感、満足感を味わっている。ベースに私の家族の濃い絆があつてのことだと思っている。感謝している。私にはすぎた配偶者であり、自慢できる子供に恵まれたことだ。加えて、それぞれの配偶者と孫たちが一層私の充実した人生を後押ししてくれている。

これから先の人生は、より以上の幸と、同時に困難も想定されるが、もとよりそれは覚悟の上で、冷静に、素直に受け入れできるように、気持ちの準備も怠りなくしておきたい。